新妹魔王の|亡霊者《ゴーストメント》

ダーク・リベリオン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

守るために悪しきものに幼い頃に命を奪われた少年は仙人から受け取った英雄の力とともに蘇った

すべての魔を滅するために、大切なものたちを守るために

少年は自身の魂と存在を燃え上がらせる

「さぁ魂、燃やすぜ！」

目次

第１話　これからは俺がお兄ちゃんだからな　―――――――　1
第２話　俺はお前らの家族で、俺は…お前らの兄ちゃんだよ　―　10
第３話　お前らなんかに負けるかよ　―――――――　19
第４話　俺は一生お人よしでいいよ　―――――――　26
第５話　俺が今、楽にしてやるぜ！　―――――――　33
第６話　澪たちに何かしでかすなら容赦はしない　―――――　38
第７話　家族を見捨てるようなマネはできないね　―――――　44
第８話　今まで食べたケーキの中で一番美味そう　―――――　52
第９話　わかった。協力してやるよ　―――――――　59
第１０話　お前にはお前を慕う仲間がたくさんいる　―――――　65
第１１話　上目だけの関係、結局は赤の他人でしかない　―――　72
第１２話　ぐっ…クソォ～！　―――――――　81

第1話　これからは俺がお兄ちゃんだからな

少年は1人無我夢中で走っていた
彼が目にしているあたり一面に広がる光景
それは炎が立ちこみ焼け崩れる建築物
全身から出血し、死に絶えた多くの人間の腐った匂い
あたりに響き渡る悲鳴の数々
そして少年はようやく一軒家にたどり着く
中に入り少年が見たものは傷だらけの自分と年も変わらない女の子が1つ下の女の子が傷だらけで気絶していた
少年は少女たちにかけより手をかそうとした。その際に部屋に飾られていたものをつかみあげる
その時、少年たちの前に少女を傷つけた張本人と思われるものの槍と刀を手にした影が現れた
少年は驚きを隠せなかったが少女には見えないのか驚く少年に動揺した
危険を感じ少年は少女に急ぎにげるよう強気な口調で物申し
逃げたことを確認すると影たちに向かっていく
だがそんな勇敢な少年の行為も虚しく影は鋭利なそれを容赦なく振り下ろす
次の瞬間少年の体からは大量の血が噴き出し少年は床に倒れ込む
影は少年が手にしたものを奪おうとする
その刹那、不思議な光が影たちに襲いかかる
影たちが怯む間に光は少年をつれさり飛び去っていった

♦？♦？♦？

何処かしらぬ滝が流れ落ちる緑豊かな場所へと飛ばされ難を逃れた少年だが、激痛と苦しみと出血により意識はもう朦朧とし
死が刻々と迫っていた
力を振り絞りながら岩に寄りかかる

少年は少女たちの名と家族の名を述べごめんねと呟くとともに息を引き取った
その時、謎の光とともに怪しい雰囲気の老人が現れ。少年を見つめつぶやく
「自らの命も顧みず守ろうとするお前のその勇気、気に入った…ふふふ」
老人は嬉しそうに笑うのと同時に少年が手にしていたものが光輝くのだった

それから何年かたった現代

とあるお店にて
「な～。なんで親子丼なわけ？」
「限定だぞ、今だけだぞ～？」
「…俺、食えないの知ってるよな？」
「まぁまぁ、なんとなくさ」

困ったような顔をする少年に男はそう答えた

「……なぁ、霊亜」
「うん？なんだよ？」
「お前妹欲しいって言ってたよな？」
「ん？」
彼の父、東城　迅の突然の質問に息子の東城　霊亜は小首を傾げる
「…まぁ。確かに言ってたけど、儚い夢と諦めたよ」シクシク
「よかったな～可愛い妹ができて」
「……へっ？」
迅の一言に霊亜はびっくり仰天的な顔で呟いた

「妹…俺に妹が？でっ、でも親父の冗談なんてこともあるしな～…だがもし本当に妹ができるとしたら俺は…」
　霊亜は脳内で妄想する
『お兄ちゃ～ん♪』ダキ
『ははは、そんなに抱きつくなって～♪』
『お兄ちゃんだ～いすき♪』
『俺もだぞ～♪』

　ホワホワホワ～

「ぐへへ～俺に妹～♪」
　霊亜は自身の理性をを抑えながらもトイレへと向かっていた
　小さい頃から妹を欲しがっていた彼にとっては願ってもないことだった
　そんなとこで口笛を吹きながらトイレに到着してドアを開けると
「ん？」
「あっ…」
　そこには用をすませパンツを履き直す途中の女の子の姿が
　それに加えて霊亜はその女の子を一目見た瞬間、何かを感じ取った
「（この感じ…もしかしてこの子？）」
　だが、少女の顔が段々と赤くなり始めてはっと我にかえった霊亜がドアを確認すると
「外れやすくなっています。入る時には必ずノックをしましょ…う」
アセアセ
　この状況はまさに最悪だった
　少女が今にも叫びだそうとしていた
「ちょ、ちょいまって！」なるべく小声
「む～～む～！」ジタバタ
　それを霊亜はとっさに彼女の口を塞いだ
「ごっ、ごめんこんなことしてでも今騒いだらまずい不可抗力だ入っ

てるなんて気付かなかったんだだから本当にごめん！何度でも謝るから頼む落ち着いて！」
「……」
　必死の説得でどうにか落ち着いてくれたようだ
　この時も霊亜は少女の愛らしい要素に見惚れていた
「ふぅ～…よかっ（べしん！）ですよね～！」
　だが彼女からの怒りのビンタからは逃れられない霊亜だった
「あんたどういうつもり！覗いたうえに中にはいって口を塞いでいいわけ連発、自分のしたことをよ～く考えてみることね！」
「だからごめんてば悪かったよ！だからお願いします許して！」
「また言い訳？ふざけないで「なにやってんだお前ら？」…迅さん？」
「おっ、親父？」
　そこにいたのは迅と1人の女の子だった
　霊亜と少女は互いに相手が迅を知っていることに驚くのだった

「はじめまして成瀬　万理亜です」
「東城　霊亜です」
「……成瀬　澪です」
「よろしくな～二人とも」
　互いに自己紹介をしたはいいが、先ほどのせいか澪のほうはご機嫌斜めの様子で霊亜もどうしたものかと悩んでいた
「こっ、これからは俺がお兄ちゃんだからな、なにか困ったりしてたら頼ってくれな」
「おっ。積極的だね～霊亜」
「いいだろ別に、二人はこれから家族の一員になるんだろ？」
　霊亜の言葉に澪と万理亜は驚く
「霊亜さんって物わかりいい方なんですね。普通ならいきなり家族が出来るなんて少しは躊躇うと思いますけど？」
「そうかな～？俺はむしろ歓迎だな。こんなに可愛い妹が出来るんだしさ」
「こいつ前々から妹欲しいっていうほど妹好きだからよ～」ワシワシ

「うっせぇぞ親父！」
　霊亜をからかう迅を見て万理亜はくすくすと澪はなにか思うところがあるのか二人を見つめた

　よく朝
「う～～ん？」
　霊亜が目を覚ますとそこには馬乗り状態の澪がいた
「あっ、やっと起きた。もう、霊亞ったら私が起こしに来たのにかれこれ1時間も起きないんだから～」
「…おは～澪♪」
「おはよう」
　寝起きの頭をフル回転させ霊亜は尋ねる
「ところでなにやってんだ？」
「起こしに来たっていったでしょ？。男の子ってこうされると嬉しいんでしょ？サービスよ」
「…ナイスサービス！」
　グットサインと万遍の笑みをこぼす霊亜
「何言ってんのよ。ほら、はやく起きて」
「起きる起きる。可愛い妹に起こされて二度寝するやつはいねえよ」
　起きて伸びをしていると
「…!?」
　霊亜は自身の右手が透け始めているのに気づいた
「霊亜？どうしたの？」
「あっ、いやなんでもないよ」アセアセ
「そう？」
　幸い澪は気づいてない様子だった
「（やばいやばい！）」
　霊亜は急ぎ、右手に意識を集中すると右手の透明化が止まりもとに戻る
「ふ～」

これで安心というかのように一息つく
「どうしたの？」
「うわっ!?」
いきなり真後ろから覗き込んできた澪にびっくりした
「なによそんなに慌てて？」
「あっ、いっいや別になんでもないよ。あはは」アタフタ
「変な霊亜。うふふふ、ほらいくわよ」
「あっ、あぁ、うん（うわ～あっぶねーバレたかと思ったー!!）」
ホッと胸をなで下ろしリビングへと向かった
「あっ、霊亜さん、起きたんですね？」
「あぁまぁ…な？」
霊亜は一瞬固まった。料理を作っている万理亜の姿があまりにもいかがわしいものだから
「…万理亜ちゃん」
「はい？」
「ｂｅｒｒｙｇｏｏｄ！」
嬉しそうにｇｏｏｄサインを送る
「あっ。もしかして霊亜さん私が裸エプロンだと思ったんですか？…ふふふ、ざ～んねんちゃんと着てま～す♪」
くるりと一回転して万理亜が自分の姿を見せびらかす
「あっ…」恥
「…何考えてんのよ変態」
「あっ、いやこれは…その」アセアセ
「誤魔化さくたって大丈夫ですよ～。霊亜さんも思春期の男の人なんですから♪」
万理亜のフォローらしからぬフォローに霊亜は涙目になりそうだった

その後、全員で家族写真をとり、霊亜と澪は二人で買い物に出かけ霊亜がバイクを取りに行くと告げて戻ってくると澪が不良どもに

ナンパされていた
「近寄らせないで！」
　そんないい気分になっていた不良の肩をぽんぽんと叩く霊亜
「あ～ん、なんだよ今いいとこなんだからじゃますんじゃねぇ…よ？」
「よっ！」
　軽く手をあげる霊亜を見て不良どもが汗をだらだらと流す
「「「れっ、れれれれれ、霊亜の兄貴ぃぃぃぃぃ!?」」」
　そして怯えた表情で霊亜のことを兄貴と呼んで叫んだ
「お前らたしか駒村組のやつらだよな？あいつ元気にしてる？」
「えっ、えぇ。そりゃ～もちろんピンピンしてっやっせ。リーダーもたまには顔見せにこいって会ったら伝えとけっていってやしたぜ」ゴマスリ
「う～ん、まぁここ最近会ってないしな～。近いうち顔見せにいくって言っといて」
　不良どもが霊亜にペコペコする光景に澪は驚く
「…ところで、お前ら何してんのかな～？」
「「「！」」」
「人の妹に手をかけるたぁいい度胸じゃねぇか？」
　どす黒いオーラと指を鳴らすその仕草はこの場にいる全員が凍りつくほどの勢いだった
「こっ、このお嬢さん、兄貴の妹さんなんすか!?」ガクガクブルブル
「あ～、俺の大事な自慢の妹だ。そんな俺の妹に手をかけるとは…覚悟はできたか？」ギロ
「「「いっ、イヤアアアアアアアアアアアアア!!!」」」
　不良たちの叫び声が虚しく響き渡るのだった

ブロロロロロローーー!!!
不良に制裁を加えた霊亜は澪を後ろの座席に乗せて帰り道を走っていた

「あっ…あの「ごめんな澪、怖い思いさせちゃって」…えっ？」
「なんもされてないか？ひどいこととかされなかったか？」
「うっ…ううん。別に」
「そっか…よかった」
　迷惑をかけたことを謝ろうとした澪は霊亜の言葉に驚きを隠せない
　澪は霊亜へと質問をすることにした
「…ねぇ霊亜」
「うん？なんだ？」
「どうして霊亜は私を助けてくれるの？」
　ふと思ったことを澪は霊亜に尋ねる
「澪ってば何言ってんだ？…当たり前だからだよ。俺はお前らの兄ちゃんだ。妹の危機に助けに行かないなんてそんなの兄貴じゃねぇ、まして家族の一員ですらない」
「霊亜…」
「安心しろ。お前と万理亜ちゃんは俺がこの身に変えても守ってやるから。何があっても」
　力強く、そして決意を込め、霊亜は澪に注げたのだった

「今から海外出張にいく？」
「あぁ、フリーランスってのは信用第一だからよ」
　出張のための荷物をまとめおえ、迅は玄関へと向かった
「俺のいない間は「わかってるさ親父」…」
「妹たちの面倒をみるのは長男の俺の仕事、今朝の件についてもな…だろ？」
「ふふ、わかってんじゃねぇか。だが俺のいない間に面倒なことおこすなよこいつ」ツンツン
「さ～て、どうだろうな～」
　おどけた感じの親子のやりとりを終えて迅はタクシーにのって行ってしまった

「お～い澪、万理亜ちゃん。晩ご飯何にしようか？」
リビングに戻ると暗い中、澪はソファーに座り、そのよこに万理亜が立っていた
「どうしたん？二人とも？」
「ねぇ霊亜、お願いがあるんだけど？」
「ん？なんだい？」
「この家から出てって」
澪からつげられたのはその一言だった

第2話　俺はお前らの家族で、俺は…お前らの兄ちゃんだよ

「この家から出てって」
　澪は冷たい表情でそう呟いた
「…そんな」
「澪さまのお言葉が聞こえませんでしたか？霊亜さん。あなたにはここから出て行って「そんな悲しいこと言うなって♪」ちょ!?」
「ふぇ!?」
　霊亜の予想外すぎる反応に加え、何食わぬ顔で二人の頭を優しく撫でる
「ちょっ、ちょっと霊亜さん。あなた自分が今どういう状況にいるかわからないんですか!?」
「えっ、なにって妹がこんなこと言うのって一つしかないだろ。お前ら反抗期なんだろ♪」
「「はぁ!?」」
　緊張感もへったくれもない態度な霊亜に驚きの声をあげる二人
「ごめんな～、俺がしっかり気づいてればよかったのによ。悩みがあるなら言ってくれれ力になるぜ？」
「ふざけないでください!!」
　すると万理亜の体から青いオーラが湧き出て着ていた衣服がいかがわしい衣服へと変わり耳が尖り尻尾と羽が生えてきた
「これが私の本当の姿、どうですか？理解できないでしょうね自分以外の種族の存在ｎ「ほへー万理亜ちゃんサキュバスだったんだ。はじめて見たよ、ぞくに言う夢魔だっけ～？」あっあれ～!?」
　驚くどころかむしろ興味を刺激してしまったのか万理亜のあっちこっちを見る霊亜
「ちょっと霊亜さんなんなんですか!?」
「何が？」
「普通なら驚くとこでしょ！私サキュバスなんですよ！人間じゃない

んですよ!?」
「わかってるって」
　霊亜はそう言うと万理亜の頭をぽんぽんと叩く
「俺の妹がサキュバスだってことだろ？」
「なんでそんな平然としてるんですかおかしいですよ!!」
「ほらほらたかいたか～い♪」
「わ～い♪…はっ!?じゃなくて!!」
　完全に場の空気は霊亜に乗っ取られていた
「そこまでよ霊亜！」
「澪？」
「あん…尻尾の先、くすぐられ…たら。…ううん」
　万理亜で遊ぶ霊亜の前に澪が立つ
「さっきも言ったけどもう一度だけ言うわ。この家からでてって！」
　澪は改めて霊亜に申した
「なんで～？家族で一緒に暮らそうよ～」
　おどけた言い方で澪の申し出を拒否する
「さっ、さっきから失礼ですよ霊亜さん！」
　やっと開放してもらった万理亜は澪の隣にたつ
「澪さまは未来の魔王なんですよ！」
「へ～魔王ね～」
　全然驚く気配もみせない霊亜だった
「そう、そしてこの家は今日より澪さまの第一の拠点となるのです！」
「つまり俺らの拠点ね。なるほどなるほど」
「なに勝手に付け加えて納得してるんですか!?」
　万理亜は霊亜に突っ込みをかますしかできずにいた
「わからないの霊亜？、私たちがこの家に来のはここを拠点にするため、私たちの関係はただのごっこ遊びに過ぎなかったの！どう？これが私たちの本当の姿よ！わかったなら痛い目にあう前に出て行きなさい！」
「ん～。俺には澪たちがそう言う子には思えないな～」
「ちょっと!?」

これでもかと言わんばかりに怒鳴り散らしたにも関わらず霊亜は自分のペースをくずさない
「だって澪は本当はこういうことをするのが嫌な心優しい子だって知ってるから」
「だからあれはあんたたちを油断させるために」
「お前らに何があったかは知らない。でも今まで辛い日々を送ってきたんだろうことはわかる。でも大丈夫、これからは家族みんなで楽しい思い出を作ればいい、辛い日々なんて忘れるくらいさ。そうだろ澪、万理亜ちゃん」
ここまでくるともはや諦めるしかなかった
霊亜になにを言っても無駄だ。彼は自分たちを家族と信じてやまない
それが逆に彼女たちの心に痛く突き刺さった
「…んで」
「ん？」
「なんでそんな簡単に受け入れようとするのよ！」
ついにたまらず澪は瞳から涙を零しながら言い放った
「私たちはあんたたちを騙してたのよ？家族になるふりをしてここを奪おうとしたのよ!?普通は許せるようなことじゃないじゃない！それでもまだあんたは私たちを家族だというの!?」
「うん」キッパリ
「なんで!?」
霊亜の即答に澪は床に四つん這いに倒れ込む
「なんなのよあんたは…」
「澪さま」
涙をぬぐう澪に駆け寄りなぐさめようとする万理亜
そんな二人に霊亜は近づく
「俺はお前らの家族で、俺は…お前らの兄ちゃんだよ」
二人の頭を優しく撫で、笑顔を向ける霊亜のこの行為が澪の以前の楽しかった日々のことを思いださせた
しかしそれは同時に澪にとって忘れられないあの出来事を思い出

させた
　すると澪は霊亜の手をはらい庭の窓をこじ開ける
「澪!?」
「もういい…もういいわ。ここにいたら私がおかしくなっちゃう…このままじゃ本当に自分の立場も忘れて霊亜と万理亜や迅さんとこのまま一緒にいたいと思っちゃいそう…だからお別れよ!」
　そう言うと澪は家から飛び出していった
「澪さま待ってください!」
「万理亜ちゃん」
　霊亜の呼び止めに一瞬霊亜を見つめる万理亜、彼女自身も澪と同じようなことを感じたがため罪悪感からかまともに彼の顔を見ることができず逃げるように澪を追いかけた
「澪…万理亜ちゃん」
　二人のいなくなったリビングに霊亜はただ佇むのだった

♦?♦?♦?

「澪さま大丈夫ですか?」
「馬鹿よ。霊亜は底なしの馬鹿…あんなに優しく接せられたら…どうしていいかわからなくなるじゃない!」
　文句をいいつつも澪の心は霊亜の優しさと暖かさでいっぱいだった
「霊亜と一緒にいるとあのころのことを思い出しちゃう、お義父さんとお義母さんとの楽しかった日々のことを…でも」
　そう思えば思うほど失った時のあの絶望感が蘇りそうで、澪はそれが堪らなく怖かった
「澪さま…」
　万理亜が澪の側に寄り添おうとした時、異変は起きた
「人よけの魔法!?」

「…敵です」
　すると突如として不気味な得体の知れない者たちが現れた
「ふへへ～。見つけたぜ～旧魔王の娘」
「貴様の命をもらいうけに来た」
　一方の影は槍を構えもう一方は右手自体が剣であり、それを突きつけるようにむかってくる
「なんだか知らないけどやれるものならやってみなさいよ！」
「もう敵が目の前にいるのですか！」
「えっ？万理亜には見えないの？」
「私にはなにも…？」
　どうやら自分には見えて万理亜には見えない敵だと澪は悟った
「だとしても構わない！倒すだけよ！」
　呪文を唱え魔法陣を出現させ火球を放つ澪、万理亜はあたりを警戒する
「こんな炎の塊、屁でもない」
「無駄な抵抗はせず、さっさと死ね！」
　だが、敵には全くと言っていいほどダメージにはなってはいなかった
　そして長引くにつれて段々敵に押され始める
「きゃあぁぁぁぁ!!!」
「万理亜!?このぉぉぉ!!」
　姿を見ることができな万理亜は敵にとってはいい的でしかなかった
　澪は怒り、魔法で攻撃するも魔法は同時に澪の気力を消費させてしまうため、使用するたびに澪は息を切らし始める
　だが、敵にはそれは好都合でしかなかった
「ふふ、はあぁぁ！」
　澪にむかって何体かが飛びかかる
「ぐっ、はあぁぁぁ!!」
　魔法で迎撃する澪だったが敵はそれをよけて澪にその刃をむける
　澪は自身が斬られるという恐怖にかられた

だがその時
「!?」
澪の服の内側の胸元部分が赤く光ると同時に彼女の体を神秘のベールが包み込んだ
「小賢しい!」
敵の槍術を食らってしまうも神秘のベールが彼女を守り、人体には害はなかったが
「きゃあぁぁぁぁ!!!」
勢いの強さで澪は吹き飛ばされた
地面に体を打ち付けながら澪は倒れた
「グッ…」
必死に立ち上がろうとするも既に目の前には敵が鋭き刃物を突きたて自分を狙っていた
「手間をとったが…ここまでだ!」
「(そんな…こんなところで…お義父さん、お義母さん…霊亜…)」
澪に向けて刃を突き出す
自身の死を悟った澪は咄嗟に目をつぶった

ブスッ!　ビチャビチャ…

あたりに血が飛び散るも澪は無傷だった
不思議に思いそっと目を見開いてみると
「大丈夫か…澪?」
「れっ、霊亜!?」
そこに立っていたのは敵に剣を突き刺し自身も攻撃で体を貫かれている霊亜の姿だった
「いっイヤァァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!!」
澪の悲しみを込めた叫びがあたりにこだまする
「澪さま、霊亜さんがどういたんですか!」
万理亜は姿が見えないため霊亜が

「(また私は失ってしまった。家族を…私があんなことしなければ霊亜がこんなことになることは…私のせいだ！)」
　自身がしてしまった結果に後悔と罪の深さを感じた
「…泣くな澪」
「へっ？」
　まさかと思い顔を上げるとそこには尚も血を流しながらも自分の頭を優しく撫でる霊亜がいた
「はぁぁ!!」
「ぐはぁ！」
「れっ、霊亜どうして!?」
「あぁこれ実は…あっ」スケスケ
　勢いよく敵を蹴りとばし澪のほうを向くとタイミング悪く体が透けた
「れっ、霊亜！」
　澪たちも驚きを隠せない
「おいおい、かっこつけて出てきた割には随分しまらねぇ登場の仕方だなおい」
「うるせぇよ！」
　霊亜のそばに寄ってきたのは小さいおばけだった
「なっなんなの？」
「あぁ、こいつはユルセン。まぁ俺の相棒ってとこかな」
「よろしくな！」
　ユルセンは軽く挨拶する
「…久しぶりだなおい」
　霊亜は敵を睨みつける
「あ～？何言ってんだお前」
「忘れたとは言わせねぇぞお前らのせいで俺は命を奪われ故郷の…勇者の里のみんながどれほど悲しんだことか！」
「勇者？…霊亜、あなた勇者の一族？」
　澪は霊亜が勇者の一族であることに驚く
「勇者の里…貴様あの里のものか？」

「あぁ、そんでもってお前の刀に切り殺されたあの時のガキだよ」
「ほ～。まさかあの時のガキが今こうして我らの前に現れるとは」
「馬鹿な奴だ。あのまま死んでれば良かったものを。わざわざまた俺たちにやられるために生き返ってくるとはな～」
敵はかつて自分たちのしたことを思い出し、せせら笑う
「……俺を殺したことも里を襲ったことも許せねぇが、俺が今それ以上に許せないのは俺の妹を傷つけたことだ！お前らは俺がこの場で地獄に送る！」
そう言うと霊亜は腹あたりに手をかざすと
腹にドライバーが出現する
そして目のようなもののスイッチを押すと瞳にGと浮かび上がった
そしてそのままそれをドライバーに挿入する
『アーイ！』
するとドライバーから声が流れる
『バッチリミナー！バッチリミナー！』

フワフワフワ～

効果音が流れるとともにドライバーからオレンジ色のパーカーゴーストが現れ、ファンキーにおどる
「…変身」
ポージングを終えてレバーを押すように動かすと
『カイガン！』
Gと書かれたアイコンが顔をイメージしたマークに変わり、霊亜の姿が光を放ちフォームの素体姿トランジェントへと変り、パーカーゴーストが素体に覆いかぶさった
『オレ！　レッツゴー・覚悟！　ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』
そして次の瞬間には霊亜の姿は変わっていた。否、変身していた
「れいあ…なの？」
霊亜と思わしきその者は頭に被さったフードを下ろした

「さぁ魂、燃やすぜ！」

今、ここに愛するものを守る戦士が悪へと立ち向かうのだった

第3話　お前らなんかに負けるかよ

「それはアイコン！…貴様何者だ!?」
「地獄から蘇った魔狩りの亡霊さ！」
「小賢しい！」
　敵が剣と槍を構え霊亜に襲いかかる
　霊亜もバックルの中から剣を取り出し応戦する
　ガキンガキンと互の武器がぶつかり合う
「くらえ！」
「ふふ～ん」ヒョイ
「今度はこちらだ！」
「へへ～ん」ヒョイ
　霊亜は華麗な動きで敵の攻撃をかわす
「ちっ、ちょこまかと！」
「ほらほら、鬼さんこちら手の鳴るほうへ～♪」
　宙をふわふわと浮く霊亜は敵をおちょくる
「くそぉぉぉ！」
「そりゃ！」
「ぐわぁぁ!!」
　反撃しようとする敵の攻撃も軽く防いで一撃を与えた
「さ～て、決めるか。はぁぁぁ…」
　オーラを纏いて印を結び
　トリガーを引くとベルトがまばたきし、目にキックのマークが現れた

『ダイカイガーン！　オレ！　オメガドライブ!!』

　右足に力が注がれる
「うぉぉぉおさせるかぁぁぁ!!」
　槍をもった敵が霊亜に向かっていく
「ふっ、はあぁ!!」

「がぁぁ!?」
「おりゃぁぁぁ!!」
「ぐわぁぁぁぁぁ!!!!」
凄じい威力のキックにより敵は断末魔をあげて爆死した
「すっすごい…」
「どうなんですか澪さま?」
「霊亜が敵を1人やっつけたわ」
霊亜の凄さに驚く澪だった
「まだまだこんなもんじゃないぜ~」
物陰から様子を見ていた澪たちは驚きを隠せず
ユルセンはわかってるかのように霊亜を見る

「後はお前だけだな」
「…図に乗るなよ。相手が1人だけと思うなよ」
すると敵が手にしたアイコンをばらまくとそれがたくさんの兵士へと変わる
「やれ!」
「「「「「ウオォォォ!!」」」」」
「ちっ!」
霊亜は負けじと応戦するもやはり数で圧倒される
「いくら強かろうと所詮数には勝てん!」
「ぐあぁぁ!」
敵の斬撃が霊亜を吹き飛ばした

「霊亜!」
「澪さまどうなっているんですか!?霊亜さんは!?」
霊亜が危険な状態になっていることに動揺する澪に姿の見ることができない万理亜は状態を尋ねる
「押されてるな…このままじゃ霊亜のやつやられちまうぜ~」
「うわっ!?なんですかあなたは!?」

「名前はユルセンって言って霊亜の相棒らしいの」
「感謝しろよ。これであんたにも見えるようになったぞ～」
　万理亜はユルセンの言ってることがあまりよくわからなかったが
　すぐにその理由に気づく
「はっ！見える…私にも霊亜さんと敵が見えます！」
「言ったとおりだろ～」
　ユルセンは誇らしげに言った
　しかし、だからと言って状況が変わるわけではない
「どうするのよ！このままじゃ霊亜はやられちゃうんでしょ!?…霊亜が頑張ってるのに私には何もできないの…私にもっと力があれば。"武蔵" みたいに強ければ！」
「澪さま」
　非力な自分を恥ぢる澪に万理亜が寄り添う
　その時、澪の胸元部分が光を放つ
「また光が…？」
「これはいったい？」
「おいおいまさか！…喜べ、霊亜を助けることが出来そうだぜ」
「えっ？本当!?」
　ユルセンはいち早く気づいたように澪に告げた
「お前が首に下げてるものを霊亜に託せ！」
「首から下げてるもの…！」
　ユルセンは尚も光を放つ澪の胸元あたりを指さす
　澪は急ぎ首に下げていたものを内側からだす
　それは以前、澪の義父と義母が彼女にお守りとしてくれた宮本武蔵の刀の鍔だった
　義父曰く、武蔵のように強くなりたいと思えばなんでもできると。事実これをもらってからというもの澪は自分が悲し時や切ない時に自分は強いとこれに祈りをこめると不思議と気持ちが和らぎ強くなれるという気になれるのだった
「…でもこれがいったいなんの役にたつのよ？こんなんで霊亜を助けられるわけないじゃない？」

「それはお前の両親が魔力で鍔の姿に変えてあるだけさ。どうやってカモフラージュしたかは知らないけどな」
「お義父さんとお義母さんが…？」
「霊亜ならその魔法の封印を解くことが出来る。急げ、霊亜を助けたいんだろ？」
ユルセンが澪の気持ちを後押しするように今尚戦っている霊亜を指さす
澪は決意すると立ち上がり鍔を握り締める
「霊亜！」
「澪？」
「これをうけとって!!」
「っと！……これってもしかして？」
霊亜にむけて澪が鍔を投げ、霊亜がそれをうけとった
「アイコンだ！目を描け！」
「簡単に言ってくれるな！」
襲いかかる敵を掻い潜りながら鍔に目を描くと鍔が煙へと変わり
次の瞬間、煙は再び形を成し赤いパーカーのゴーストへと姿を変えた
その光景に澪たちは驚く
「こいムサシ！」
霊亜の呼びかけに答え、ムサシパーカーゴーストがベルトに飛び込んできた
そしてベルトから武蔵の力を宿したアイコンが出てきた
「武蔵のアイコン！」
驚く敵をよそにベルトを開くと霊亜は澪のほうを見つめた
「澪…お前がどう思っていようと構わない、お前はやっぱり俺の自慢の妹だ。まってろこいつ倒して帰るぞ」
そう言うとアイコンのスイッチを押す
「…霊亜」
「万理亜ちゃんもだぞ」
「霊亜さん」

『アーイ！』
アイコンを外すとオレパーカーゴーストが離れて再びトランジェントの姿に変わった
『バッチリミナー！バッチリミナー！』
ベルトにムサシのアイコンをセットしたと同時にベルトから現れたムサシパーカーゴーストがザコ眼魔を数体斬り倒した
『カイガン！』
霊亜はそのままトリガーを引くとベルトがまばたきムサシの顔をイメージしたマークに変わる
『ムサシ！　決闘!!ズバッと超剣豪!!』
トランジェントの姿ゴーストにムサシパーカーゴーストが覆いかぶさり
赤き姿へと変わっていた
「姿が変わった！」
「武蔵の力を手にした姿さ」
「いってください霊亜さん！」
ガンガンセイバーを二刀流モードにチェンジする
「ふん。いくら武蔵の力だろうと数で圧倒してくれるわ！」
ガキン！　キンキン！
「ぼ～か、これには武蔵の力だけじゃねぇ！」
「ぐぁ！」
「澪の想いも篭ってんだ。お前らなんかに負けるかよ！」
先ほどとは打って変わり２本の刀で兵士を蹴散らし残るはただ１人となった
「おのれーー！」
「はっ、せりゃ！」
「ぐあぁぁ！」
敵が霊亜に挑むも返り打ちにあい地べたを転がる
霊亜はその隙に剣をベルトにかざす
『ダイカイガーン！　ガンガンミナー！ガンガンミナー！』
背後に目の紋章が現れ、２本の刀が炎を纏う

「くっ、うおおおお!!」
「はぁぁぁ…うらぁ！」
敵の攻撃を小太刀で受け流し大太刀で切り裂き
「はっ！はぁ!!」
連続で敵に斬撃を浴びせ、最後にガンガンセイバーのトリガーを押す
『オメガスラッシュ！』
「はぁぁぁぁ!!!!」
「ぬぉ…ぐっ、グアァァァァァァ!!!!」
断末魔とともにもう一体も霊亜の前に敗れ去ったのだった
「ふぅ～」
『オヤスミ～』
戦いを終えてアイコンを抜くと霊亜の姿は元に戻った
「やったな霊亜」
「とうぜんだっての！」ドヤ
「ほらよ眼魔のアイコンだ」
「サンキュー」
霊亜はユルセンから眼魔のアイコンを受け取ると目を描いた
すると眼魔アイコンが形を変えて、赤く光る魂へと変わる
「あ～がぶっ…ゴクッ…ふ～。ご馳走様でしたっと」手合わせ
霊亜はその魂を飲み込むと何回か噛み締めごくっと飲み込み手を合わせた
「これでまた少しの間は大丈夫だな」
「あぁ、あとでもう一個も回収しとかないとな」
「じゃあ後は頼んだぜ～」
ユルセンはそう言うと姿を消していなくなった
「…霊亜」
振り向くと澪と万理亜が申し訳なさそうに霊亜を見ていた
「霊亜…その、私「澪！万理亜ちゃん！」!?」
「!?」
彼に対しひどいことをしたうえに勝手に出て行ったにも関わらず、

自分たちの無事に安堵し、自分たちを抱きしめる霊亜に驚く二人
「よかった。無事で二人に何かあったらと思うと俺！」
「れい…あ…」ジワ
「れいあ…さん」ジワ
　自分たちにここまで心から心配してくれたことに嬉しさと罪悪感が同時に湧き出し
「うっ、うわぁぁん！ごめんなさい！」泣
「ごめん、ヒク…なさい！」泣
「大丈夫、大丈夫。さぁ帰ろう。それにいろいろ聞きたいだろうからな」
　優しく二人の頭を撫でながら
　しばらくの間、霊亜は自分の胸を二人が泣き終えるまで貸してやるのだった

第４話　俺は一生お人よしでいいよ

　眼魔との戦いを終えて
「…なるほど。つまり霊亜さんと迅さんはともに元勇者の里の人間で、あの眼魔という化物が里を襲ってきて、その際に眼魔に命を奪われたところを仙人に助けてもらって生き返り、里のみんなのために自ら出て行って今につながるんですね。おまけに私たちの正体も最初から知ってたなんて。本当に食えない方々ですね」
「あははごめんごめん」アセアセ
「霊亜さんはなんでも知ってるんですね」
「なんでもは知らないさ、俺が知ってるのは知ってることだけさ」
　現在、霊亜は万理亜に自分のことを話しており、澪はその間に入浴中であった
「私たちの正体もしようとしてたこともお見通し…最初から手のひらで踊ってただけなんて、まったく霊亜さんには敵いませんね」
「別にそんなつもりはないさ。俺にとっては万理亜ちゃんたちが人間だろうが魔族だろうが家族には変わらないからな。あのまま正体を隠してい続けてても俺はなんにも触れずに接しようと思ってたし」
「心が広いんですね霊亜さんは」
「まぁ～な」ドヤ
　得意げに威張る霊亜だった

　入浴を終えて風呂場から出てきた澪は先ほどの戦いのことを思い出す
「万理亜に魔力の使い方を教わったのに、霊亜がいなかったらあのまま私は殺されてた。思い出しただけで震えが止まらない。ダメだ私は…」
　澪が落ち込んでいると
『大丈夫だよ澪、お前には俺がついてるからさ』

「霊亜……えっ？霊亜？」
『よっ』
　ドア越しから霊亜が澪に話しかける
『ごめんな澪』
「なっ、なんで謝るのよ」
『いろいろ隠してたからさ。俺が勇者の一族であること。俺が……死人だってこととかさ』
　澪に謝罪する霊亜はいつになく悲しそうに呟いていた
『驚いただろ？死人だってことを知って』
「…うん」
　事実あの時、澪は心底驚いていた
　敵に霊亜が刺された時。霊亜の体が透けた時のことが
『…怖かった』
「えっ？」
　霊亜から澪にとっては信じられないような言葉が帰ってくる
『俺の秘密を知ったら澪たちが俺の前からいなくなるんじゃないかってさ…俺にとってお前は家族だ。どんなことがあろうと…でも澪はどうなのかって思ってた。もしかしたら俺のことを拒絶するかもしれない、一緒にいられなくなるかもと思うと、それがとてつもなく怖いかったんだ』
「霊亜…」
『でも、もうお前は俺の秘密を知った。…もしお前が俺を拒絶や非難するならそれも覚悟しているよ』
「違う…私は…」グラ
　ドテ
『…澪？おい澪大丈夫か？」ガチャ
　物音を聞きつけ霊亜が中に入ると澪が倒れていた
「澪！」
　気づいた霊亜はあわてて駆け寄る
「大丈夫か？」
「…平気」

「のぼせちゃったんだな。立てるか？」
　ペシっ！
「!?」
　伸ばした手を叩くように澪は払う
「…澪？」
「バカ」
「えっ？」
「霊亜、私を舐めすぎよ。そりゃ最初は驚いたわよ…でもだからってそんなことくらいで拒絶とかしたりするような安い女だと思わないでほしいわ！」
　澪は怒鳴るように霊亜にいった
「…それにあんただってそうだったじゃない。私と万理亜が正体明かしても平然としてたし」
「そっ、そうだな～」
「本当、あんたは超ド級のお人よしよ」
　呆れたように澪は呟いた
「いきなり妹としてこの家に来た私たちを…魔王の娘だと知ってもなお私たちをあっさり受け入れて、これをお人よしって言わなければなんだっていうのよ？」
「ふふ、お人よしか…そうかもしんないかな」
　照れくさそうに霊亜は答える
「…でも」
「っ！」
　すると霊亜は澪の頭を優しく撫でた
「それで澪たちを守れるなら、澪の笑顔を守れるのなら。俺は一生お人よしでいいよ」
「!?」
　言い放った。いつになく真剣な表情を浮かべ霊亜は言い放った
　その言葉と目には一切の偽りもない。
　ただ純粋に澪を万理亜を守るという意思を持った目だった
「…本当にお人よしのバカなんだから」

「照れる顔、やっぱ可愛いな」
「うっ、うるさいわね！」
　二人の空間があたりを包む
「おや～？お二人共すっかり打ち解けたようですね～」
「なっ、なによ万理亜、私は別に！」
「霊亜さんの戦う姿に見惚れてたくせに～」
「しっ、してないわよ!!」
　澪と澪をからかう万理亜に苦笑いをする霊亜だった

「…で、そろそろ聞きたいんだろ？俺のあの姿のことを」
「うん」
「はい」
　リビングへと場所を移して澪たちは霊亜にあの姿について尋ねる
「あの姿の時の名はゴースト。仮面ライダーゴーストだ」
「仮面ライダー…」
「ゴースト…」
　二人は聞きなれない単語に小首を傾げる
「そう、俺はゴーストとして眼魔と戦う使命がある」
「あいつらのことね」
　澪は自分たちを襲った眼魔たちを思い出す
　やつらは強かった。自分の力ではどうすることもできず、無力であることを思い知らされた
「あんな奴らがいたなんて」
「私はあのユルセンっておばけがいなければ姿すら見えなかったです」
「当然さ、眼魔は本来人間の目には見えないんだからな。いや、万理亜ちゃんも見えなかったとなると悪魔もか？」
「えっ？」
　霊亜の驚きの一声に声をあげる二人ではあったが
　先の戦いで姿を直視出来なかった万理亜にとっては納得いく話で

あった
「でもだったらどうして私には眼魔が見えて万理亜には見えなかったの？」
「奴らを直視する方法はいくつかあるが澪が奴らを見れた理由はこれだ」
　そう言うと霊亜が見せたのはアイコンだった
「それって」
「そう、武蔵の鍔にカモフラージュしてたこれだ。これを持つ者は普段は見ることができない眼魔を見ることが出来る。後はユルセンが触れてる者もな。ほかの方法は今のところないかな」
「気になってましたがアイコンってなんなんでしょうか？」
「アイコン、これにはかつて歴史に名を轟かせた英雄の魂が宿っている」
「英雄の…魂」
　自分がもらっていた鍔がそんなにすごいものだったことに驚きを隠せない澪だった
「そう、そして俺は今、この英雄のアイコンを探し集めているんだ」
「どうしてアイコンを集めるの？」
　なぜと霊亜に聞く澪に霊亜は答えた
「このアイコンを１５個集めた時、集めた者の願いを叶えてくれると言われてるんだ」
「まるでどこぞの漫画雑誌に出てくる７つ集めるとドラゴンがでる玉みたいな感じですね」
「あはは。まぁそんな感じ、その力で俺を生き返らせてくれと願うのが目的だ」
　自分のなそうとしてることを二人に打ち明ける
「なるほどなるほど。それで」
「ただ、集めるのはいいんだが。俺のこの体にもデメリットがあってな」
「デメリットって？」
　霊亜の言ったデメリットが気になった澪は問うた

「俺は今、魔力で存在を維持している。つまり俺は魔力が尽きた瞬間にこの世から完全に消滅する」
「!?」
消える。その言葉が霊亜の口から放たれた瞬間に二人は驚く
「魔力が尽きたら消滅って…」
「そんな…」
「もしそうなったとしたら俺の魂がどうなるのかはわからない。もしかしたらこの世から消えるだけじゃない、魂すらも消滅するかもしれないんだ」
そういった恐怖と常に霊亜は戦いながら今までを過ごしてきたのだ
「魔力が尽きたら消滅はわかりましたが、魔力を回復することはできないんですか？」
「もちろん魔力を回復させる方法はある。それがこれさ」
そう言って霊亜が見せたのはあの戦いで倒したもう一体の眼魔の魂だった
「これが眼魔たちの魂、眼魔魂さ」
「眼魔魂？」
「そう、眼魔のアイコンに目を描くことで具現化する魂さ。こいつこそ、俺の魔力を回復させることができるアイテムさ。これを食えばおよそで言えば最低1ヶ月は持たせられるかな」
話しを聞いて眼魔魂をまじまじと見つめる二人
「ただ。さっきも言ったがこれはあくまおよそってだけで力を沢山使えば魔力はその分だけ減り、俺がこの世にいられる時間が短くなっちまうんだけどさ」
「じゃあそれまでにアイコンを15集めないと霊亜は…」
「…そう。一応今まで集めたアイコンは澪の持っていた武蔵のアイコンを含めて全部で4つだ」
「では残り11個ということですね」
万理亜の問いに霊亜はうなづいた
澪は少し考え込むと決心した表情で立ち上がる

「……霊亜！」
「えっなに？」
「私たちにもアイコンを探すのを協力させてほしいの！」
「えっ？」
　澪の一声に霊亜は驚く
「私、守られてばかりはもう嫌なの！少しでもいい、私は出来ることがしたいの！……それに」
「それに？」
「……あっ、あんたに貸しを作ってばっかじゃ私の気が収まらないの！だから、あんたが生き返るために私が協力してあげるって言ってんのよ！反論なんかさせない。やるったらやるんだから！」
　そう言う澪だが内心は少し違っていた
「（きっと霊亜なら私を守るためなら簡単に命を投げ出そうとしちゃうはず。いくらゴーストだからってそんなの危なすぎるわ、私がしっかり見てなきゃ。もう霊亜にあんな危険なことをさせたくないもの！）」
　霊亜の身を案じる優しい思いだった
　何はともあれはっきりと自身の思いを伝えた澪を見て霊亜は唖然とするもすぐに笑みを浮かべ澪を優しく抱きしめる
「ありがとう澪。なんていい子なんだ…お前が俺の妹で本当に嬉しいよ」
「なっ、何言ってんだか…」
　霊亜の言葉に照れくさそうに顔を赤らめる澪だった
「なるほどなるほどそうですか～。実は1つ今後のアイコン集めに役立かもしれない方法があるんですよ」
「えっ？」
「そんな方法あるの？万理亜？」
「おまかせください。ぬふふふ～」
　このあと万理亜の方法のせいで澪が苦労する羽目になるのは言うまでもないお話し…

第５話　俺が今、楽にしてやるぜ！

前回、今後のアイコンを集めの協力を申し出た澪
それに伴い万理亜が霊亜たちに提案したものとは…
「主従契約魔法、霊亜さんとは澪さまと主従の契約を結んでもらいます」
リビングの床に魔法陣が刻まれており、準備は整っていた
「質問、なんで主従関係になる必要あるん？」
「まぁあくまでも形式上ですが契約することにより魂が結ばれた者同士なら互いを感知できるんですよ。その特性を使ってアイコン集めの効率を上げようということです」
「ふむふむ…なるほどな」
「ではご理解いただけたようですので早いとこ進めましょう。この魔法は万月の時にしか使えないんですよ。ちょうど今夜は万月、このチャンスを逃す手はありませんよ！」
「そうなんだ」
霊亜は万理亜の説明を聞いてこの魔法のことを理解する
「でもいいのか澪？」
「べっ別に私はいいけど…霊亜はあたしとじゃ嫌？」
「いや、全然。むしろ喜んで」キッパリ
「そっ、そう…まぁ居場所がわかればいいし」
あまりにも即答だったので逆に澪のほうが困ってしまう
「では、お二人共同意ということで早速はじめましょう！」
そう言いながら万理亜は澪の手を取る
「澪さまにとっては初めての魔法ですのでサポートはまかせて下さい」
「うん」
「…澪さまの手の甲に出た魔法陣に霊亜さんがキスすれば契約成立です」
万理亜が契約の流れを説明する
「え～。手の甲なの～…どうせならほっぺとかがいいな～」

「なっ!?」
「なるほどそれはめいａ…ゲフンゲフン。だっ、ダメですよ霊亜さん」
「そうよ！ただの契約でなんでそこまでしなきゃなんないのよ！」
澪の否定に軽くショックな霊亜だった
その時だった
「うん？」
霊亜の手の甲に魔法陣が現れた
「万理亜ちゃんが言ってたのって…これ？」
「えっ？」
「ふっ…」ニヤ
「ちょっとどういうことよ万理亜!?」
先ほどと手順が逆なことに気づいた澪が万理亜に怒鳴るように問いただす
「あっれ～おかしいですね～。どこで間違えたんｄ「どうするのよ!?これじゃ！」とっ、とりあえずこうなったからには澪さまが霊亜さんの手にキスすればいいかと～」
「冗談じゃないわよ！なんで私が霊亜の下僕になんなきゃいけないのよ!?」
「別にそんな風に思わなければいいだけじゃ…ってあれ？」
手を見ると魔法陣が点滅し始め、消えそうになっていた
「なんか消えかかってるよこれ？」
「はっ!?澪さま早く霊亜さんにキスしてください！」
「で、でも…」
「次の万月になれば解除できますから急いで！」
万理亜が急ぐよう急かすもためらっている間に魔法陣が完全に消えてしまった
「あらら…消えちった」
「そんな～…」ガク
なぜかすごくがっかりな万理亜は床に座り込む
なんとか回避できたと澪が思っていると
「!?」

突然澪の首に首輪のような文様が現れた
「なっ、なに、これ…？」
力が抜けたように座り込んだ澪
「ん？澪、どったの？」
心配した霊亜が澪の体に触れた瞬間
「ふあぁぁぁ～!!」
突然呻き出す澪に驚く
「み、澪！どうしたんだ!?」
「もう呪いの効果が発動しちゃったんですね！」
「呪い？どういうことなん万理亜ちゃん？」
「主従関係の本来の目的は忠誠心を維持することです。つまり配下が裏切りなどの行為をすると呪いが発動する仕組みなんです。おそらくさっきキスをしなかったから呪いが発動したのかと」
状況を分析し、霊亜にことを説明する
「なるほど…一応聞くけど、命に関わることは？」
「それはありません。他の人ならともかく私ほらもう知ってますでしょうがサキュバスですから、この契約に私の魔力を使ったので澪さまはサキュバスの呪いにかかってしまったわけです」
「ほうほう」
「なっ…納得して、ないで…早く助けてよ…」ソワソワ
こんな状況で冷静に分析をしている二人に澪が突っ込んだ
「ともかくいつまでもこの状態はかわいそうだ。どうやって呪いを解くんだ？」
「簡単です。服従させればいいんです！」
「どう服従させればいいんだ？」
キョトンとする霊亜に万理亜は澪の近くに近づいて説明する
「澪さまを触ればいいんですよ。今の澪さまは呪いの効果で感覚が引き上げられてるんです。快楽を与えてあげれば落ち着いて自分から忠誠を誓うはずです」
「ちょ、万理亜…!?」
「もう少しの新防ですよ～いま霊亜さんが楽にしてくれますから～別

に澪さまの快楽に堕ちた顔を見たいだなんてこれっぽっちも思ってませんよ～。さぁ霊亜さんお願いしま…あれ？」
霊亜にお願いしようとするが霊亜の姿が見当たらない
「霊亜さんどこですか～？」キョロキョロ
万理亜があたりを見回し霊亜をさがす
「はぁ…はぁ……!?」ムニュ
すると突然、澪の胸が背後からわしずかみにされる
「あっ…あぁ～」
「うん？」
『ダイカイガーン！　オレ　オメガドライブ！（意味深）』
「任せてくれ！俺が今、楽にしてやるから」
なんと霊亜はいつの間にか後ろに回っていた
「速!?」
これには万理亜もびっくりだった
「やっ、やめなさいよ…１００回殺すわｙ…っ!?」
「やめとけよ。俺に取ってはご褒美にしかならんよ」ドヤ
「うっ…」
「安心しろ……優しくしてやるから」
霊亜はわしずかみにしている手でゆっくりと澪の胸をわしわししていく
「あん…あぁ…あぁ～」
そのまま霊亜は左手を澪の脇に移す
「うっ…うぅ～はぁあぁ～ん！」
「どうやらそこが弱点みたいですよ霊亜さん」
「そうみたいだな…でも。ここだけじゃないんだろ～？」ハム
「…っ!?」
そう言いながら霊亜が澪の耳たぶを甘噛みする
それもいやらしく
「（ダメ…ダメだよ。すごく…きもち、いい…このままじゃ。お兄ちゃん…お兄ちゃんお兄ちゃ～～ん!!）」

♦？♦？♦？

「やりすぎてもうたなｗ」
「本当、見かけ以上に肉食系ですね」
　あの後、澪はくたくたになるまで快楽に溺れ、ソファーで体を休めていた
「あはは…て言うかさ、万理亜ちゃん」
「はい？」
「今さらなんだが。この主従契約、しなくてもアイコン見つけたらケータイとかで連絡とればいいんじゃね？」
　その言葉を聞いた瞬間、ギクっと言わんばかりに体を振るわせる万理亜
「けっ携帯なんていつ使えなくなるかもわかりませんからこっちのほうが確実ですよ明らかに!!」
「まぁ別にいいけど…万理亜ちゃん」
「はい？」
「背後にご注意を…」
　霊亜がそう言った瞬間、万理亜の頭がわしずかまれる
　背後には鬼の如き形相の澪がいた
「万理亜…ちょっと話しがあるの」ゴゴゴゴゴ
「ひええ～澪さま頭が！頭が割れそうです～!!別にわざとじゃないんです！いたいですいたいです！割れます～!!」
　万理亜の叫びが家中に響き渡った
「ご愁傷様」
　霊亜は連れてかれた万里亜に黙祷を捧げるのだった

第6話　澪たちに何かしでかすなら容赦はしない

万理亜の策にはまり霊亜と澪は主従契約により主従関係へとなってしまい
サキュバスの呪いをかけられ、快楽に溺らされた日から次の日の朝
何はともあれ霊亜は澪が通う学校に転入するため制服に着替え、学校に万理亜も含め3人で向かっていた
「あ～澪の制服姿いいね～これから澪と同じ学校に行けるなんてなんて俺は幸せ者なんだろ～」
「何言ってんのよあんたは…」
「霊亜さんらしいですね」
霊亜に澪と万理亜は呆れていた
そんなこんなで学校についた霊亜と澪
万理亜はあの見た目でも成人なので学校に通う必要がないため二人を送り届けたあとは家に戻っていった
「なにも夏休みあけに転校しなくても」
「俺は1分1秒でも澪と一緒にいたいので」ドヤ
「あっ…そう」
そんなこんなで学校についた二人
「いい霊亜。くれぐれも同居してるっていうことばらさないでね」
「あぁわかった」

♦？♦？♦？

「てなわけで今日から世話になる澪の兄貴の東城霊亜だ。妹に近づく男は容赦しないんでよろしく！」
「言ったそばからばらしてんじゃないわよ！」
「痛て！」
転入先のクラスで堂々と約束を破った霊亜に澪が制裁を加えた
そんな時だった
ガタッ

1人の女性が立ち上がったうえに自分を見て驚いていた
「…れいあ？」
「…えっ？」
女生の顔ををまじまじと見てみるとその子は霊亜のよく知る人物だった
「まっ、まさか～…ゆっ柚希!?」
そう、彼女は霊亜と同じ里の出身であり霊亜にとっては幼馴染の野中柚希（のなかゆき）だった
霊亜が驚く中、クラスの視線も気にせず柚稀が霊亜に抱きついてきた
「おっ、おい柚稀!?」
「霊亜…会いたかった」
「…おっ、俺は」
「霊亜？」
何年ぶりの再会のため、柚稀はしばらく離してくれなかった
さらにその光景を見た澪は自分では気づいていないが
内心、嫉妬のような感覚に襲われたのだった

♦？♦？♦？

「さ～てと。飯だ飯だ～」
時刻はお昼を回っていた
「よ～し昼休みだ―！澪～♪「ふん。私なんかより、再会した幼馴染さんと一緒にいればいいじゃない」ちょ、澪!?」
怒っている様子の澪は霊亜にそう告げると自分の友人たちをつれて行ってしまった
ティラリ～ン♪ティラリラリ～ラ～ン♪
「……そっ、そんな」ガクッ
霊亜は澪と学校で一緒に食事したいと思っていたため澪の冷たい態度はとても答えた
「澪、待ってくれ！違うんだ澪～～!!!」涙目

絶望したような顔で澪の名をつぶやく霊亜だった
「大丈夫か～転校生」
その時、1人の男が声をかけてきた
「うぅ…」泣
「おいおい。泣くほどのことか？」
「おめにふぁわかにふはおふぇのひもふぃふぁ～（お前にはわかんねぇよ俺の気持ちが～）」
「なっ、何言ってんだかわかんないけど落ち着けよ」
もはやまともに言葉を喋れないほど霊亜は狂っていた
「成瀬さんを妹って言ってたから思ったけど。お前…シスコンか？」
「うぉ～みふぉ～（うぉ～澪～）」
誰がどう見てもその通りだった
「とりあえずさ、よかったら一緒に飯食おうぜ。あと俺、滝川。よろしくな」

♦？♦？♦？
滝川が校内の屋上のドアの鍵を簡単に開けて
現在、屋上で食事中（と言っても実際食べてるのは滝川のみ）
「しかしお前大した肝だな。学園が誇るアイドルである澪姫と柚稀姫。その二人とフラグたてて全学年敵に回してんのに堂々としてるとはな」
「関係ねぇよ、俺は俺のやりたいようにやるだけだ。澪と素敵な学園ライフをおくれりゃそれでいいさ～」
「おいおい柚稀姫はいいのかい？幼馴染なんだろ？」
「……柚稀には迷惑かけてばっかだし、勝手に居なくなっちまった俺が今さらどう接すれば」
かつての出来事のせいで素直に柚稀と向き合えないことを悔やんでいた
「気にすることないんじゃねぇか？何があったか知らないけど少なくともそう思うぜ？」

「…ありがとな。やっぱ"魔族"でもいいやつはいいやつだな」
「!?」
　霊亜の言葉に滝川は驚く
「なっ、なんのことだ？」
「とぼけなくたっていいよわかってっから」
　その瞬間、滝川は霊亜から距離をとる
「…お前、どうして？」
「俺、わかっちまうんだよ魔族とかの気配やら何やらな。どうせ澪の監視役かなんかだろ？」
　あっさり正体を見抜いたにも関わらず霊亜は相変わらずだらけきっていた
「何突っ立てんだよ？早く食わねぇと次の授業遅れんだろ？」
「お前なんでそんな余裕そうな顔してんだよ？俺はお前の言うとおり現魔王派の魔族で監視役なんだぞ？正体を知られたからには今ここでお前を消すこともしかねないんだぞ？」
　そう言うと魔力を湧き出させ構える滝川だったが
「……やれるもんならやって見やがれ」ギロ
「!?」
　さっきのふざけた態度とは裏腹に、しかも自分と互角かそれ以上の魔力を湧き出させる霊亜に息をのむ
　すると霊亜は魔力を引っ込めまたふざけた態度で接する
「安心しろ。お前が澪たちに何かしでかすなら容赦はしないが、それ以外は上司に報告とか俺をどうこうする作戦をたてるとか好きにしてくれていいさ」
「…ぷっ、あははははははｗｗｗｗなんなんだよお前おもしろすぎｗｗｗお前みたいなやつは見たことがないよ、あ～腹痛いｗｗ」
　霊亜の態度に笑いだす滝川
「は～…わかったよ。今のところは何もしない。ただし俺とて魔王派の者だ。転んでも只じゃ起きないぜ」
「好きにしろ。だがこれだけは覚えとけ…澪や万里亜ちゃん。柚稀に危害を加えたらただじゃ済まさない」

互いにお互いを睨む二人
その時、チャイムがなる
「さて、戻るとすっか～」
霊亜はめんどくさそうな態度のまま立ち上がり滝川の横を通り過ぎた
滝川は自分を横切った霊亜を見つめる
「お～い滝川。いつまで突っ立てんだよ。いくぞ？」
「…あぁわかったよれいっち」
霊亜の呼びかけに答えて教室にもどる滝川は内心思っていた
「(東城霊亜か…面白いやつと出会ったもんだぜ)」

♦？♦？♦？
「……」
「なっ、なぁ～澪。まだ怒ってんの？」
「話しかけないでよ」プン
「怒るなって、俺だってびっくりしたんだよ～」アセアセ
なんとか大好きな澪の機嫌を直そうとあれこれやる霊亜だが、一向に澪は機嫌を直してはくれない
困り果てていた時だった
「お～い澪さま～霊亜さ～ん！」
向こう側でこちらに手をふる万里亜の姿があった
「お勤めご苦労様でした…ってあれ？なんかお二人共険悪なムードですね？」
「べつにそんなんじゃないわよ」
「澪～」アセアセ
「なんだかよくわかりませんが、今はそれよりもお二人共に見せたいものがあるんですよ！じゃじゃ～ん!!」
そう言うと万里亜が取り出したのはなにかの装置だった
「なによそれ？」
「よくぞ聞いてくれました。実はこの万里亜、前回の経験を活かして

アイコンやユルセンさんを頼ることなく眼魔を目視できるものを作れないかと考え、ついにそれを完成させたのがこの液体です！これをこの機械にセットして吹きかければ眼魔を見つけ出せるというわけですよ！」
「すっ、すごい…じゃあこれがあれば？」
「そうです！戦いに多いに役立つわけです！」ドヤ
　誇らしげに言う万里亜だった
「すごいじゃない万里亜…でも、よく作れたわねこんなの」
「あ～いえ、それが～。これ殆どは私が作ったんですけどどうにもひと手間足りなくて悩んでいた時、変なおじいさんが現れてこの液体を作るアイテムをくれたんです」
「変なおじいさん？」
　万里亜の言っていることに澪は小首を傾げる
「それ多分おっちゃんだな」
「おっちゃん？」
「あっ、やっぱりあの人霊亜さんの知り合いなんですね」
「まぁな。詳しいことは帰ってからにしようぜ～」
　そう言って澪たちを連れて帰ろうとした時
「霊亜」
　自分を呼び止める声が
「…柚稀」
　そう、幼馴染の柚稀だった
「大事な話があるの…二人だけで」
「うん？」
　彼女は霊亜にそう告げるのだった

第7話　家族を見捨てるようなマネはできないね

同じ勇者の里の出身であり、転入した学園では澪同様に姫と称される

幼馴染である柚稀と再会した霊亜は転入初日後、帰ろうとした直後、彼女に呼び止められ

そのまま彼女に連れられてファーストフードの店に

「…なぁ柚稀、別に並んで座らんでもよくね？」

「ダメ、重要な話なの。他の人に聞かれたくない」

そう言って霊亜に自分の体を密着させる

「ありがとう来てくれて」

「ゆっ柚稀…？」

「…会えてとっても嬉しい」

「……もう、5年も経つんだっけな。速いもんだな時が経つのは」

霊亜は脱力感に苛まれるかのような元気のない返事を返す

「柚稀も随分変わったな」

「霊亜こそ…前は私が抱きついたら霊亜もぎゅって抱きしめ返してくれた」

「…そう、だったな」

「…どさくさにお尻も触った」

柚稀の一言に霊亜が体をびくつかせる

「でも今の霊亜はあの頃と違う」

「柚稀？」

「霊亜、私を避けてる」

「!?」

確かに柚稀の言っていることは当たっていた

自分は無意識に彼女を避けていたかも知れないと霊亜も内心は気づいていた

「やっぱりまだ気にしてるの？5年前のこと」

「……あぁ」

霊亜は悔しさから持っていたグラスのコップを握り締める

「ちがう、あれは霊亜のせいじゃない。霊亜が責任を感じる必要はない」
「いや、俺のせいだ。俺がお前に…これをプレゼントしたばかりにお前たちを危険な目に合わせた上に里をあんなことにさせちまった」グヌヌ
オレゴーストアイコンを握り締めながら霊亜はつぶやく
「絶対ちゃうもん。だって霊亜がいなかったらうちら今頃死どった」
「…」
「霊亜のおかげでうちらは今こうして生きていられる…」
「…柚稀」
すると柚稀はさらに霊亜に密着し、頭を霊亜の肩におく
「でもそのせいで霊亜はこんな体になってしもうた。うちらのせいで霊亜は一度"死んでしもうた"」
「お前が気にする必要はない。俺は守りたいから守ろうとしてこうなったんだ。後悔はしてないよ」
「でも…」
「心配すんなって。俺はいずれ生き返るんだからさ。余計なことは考えず、お前はお前でいてくれ」ニコ
そう言って霊亜は後悔で体を振るわせる柚稀の頭を優しく撫でた
柚稀は霊亜がこうしてくれたことが嬉しかった
自分が知っている優しい霊亜のままでいることが
しかし、そんな霊亜だからこそ柚稀は伝えねばならぬと思った
そうして柚稀は口を開く
「霊亜。お願いがあるの」
「お願い？」
「…これ以上、成瀬澪と関わらないで」キリ
そう、彼女は霊亜に告げるのだった

◆◆◆

「まさか澪さまのクラスメイトが勇者の一族だったなんて」
「…私、バカだったわ」
「仕方ありませんよ。簡単に気づかれるような人を監視役に選ぶ人なんていませんでしょうし」
　落ち込んでいる澪を万里亜がフォローしようとする
「そうじゃないの、霊亜の幼馴染っていう時点で気づくはずなのに…あの子が霊亜に抱きついてきた時、私。気が動転してて気づかなかった」
「まぁ、向こうから攻めて来ない限りは大丈夫でしょう。ただでさえ悪魔の刺客たちや眼魔の相手で精一杯なのに。勇者の一族を相手にしてる余裕なんてありませんよ」
　万里亜はそう言うとジュースをストローでチューチュー吸う
「(でも、私が思ってるのはそうじゃない。私は…!?)」
　その時、澪の首元に呪いの文様が浮かび上がる
「どうしました澪さま?」
「なっ、なんでもないわ!」
「そう…ですか?」
　万里亜は心配そうな顔をするも澪の言葉を聞いて再び視線をそらす
「(違うの…これは覗きじゃない!私は霊亜の身を案じてるだけ!…この程度で呪いが発動するなんて)」
　呪いの影響で体をもじもじさせていると
「嫌だね」
　霊亜たちの席から霊亜のその一言が聞こえた
「…れい、あ?」

◆◆◆

「…これ以上、成瀬澪と関わらないで」キリ
「嫌だね」
「どうして…?」
　柚稀は霊亜の反応に驚く柚稀

「いくら柚稀の頼みでも聞けない相談だ。澪と万里亜ちゃんは俺の家族だ。家族を見捨てるようなマネはできないね」
「…霊亜」
「澪は誰かさん達のくだらない考えのせいで両親を奪われたばかりか自身も狙われてる。でもあいつはなんの罪もない1人の女の子なんだ。だからこそ俺はあいつを守る。俺が…妹であるあいつを守る。それが今の俺のすべきことだ」
　そう思う霊亜の目には一切の曇りもなかった
「もし里のみんなも澪の命を狙うつもりなら俺は戦う…例え本当に里を裏切ることになっても」
「…本気なの？」
「あぁ…澪を守るのは俺の約目だから」
「霊亜」
　霊亜の覚悟に揺れる思いの柚稀だった
　そんな時
「お客様！お釣りが!?」
　店員の呼び止めも聞かずに去っていった澪の姿を微かに目視した
「澪？」

◆◆◆

「澪さま～、澪さま～待ってくださ～い！」
　逃げるように去っていった澪を追いかけていた万里亜は何度も彼女に呼びかける
　そして止まったところでやっと追いついた
「…ねぇ万里亜。どうしよう」
「ふぇ？」
「…もう、霊亜とどう接していいかわかんないよ!!どうして…どうして霊亜は自分の故郷の人たちを敵に回してまでも私を守ろうとするの？…どうして」涙
「いいことじゃないですか。霊亜さんが本当に私たちを大切にしてく

れてるってわかったんですから」
　霊亜の優しさを、さらに思い知った澪は自分の気持ちに戸惑う
「霊亜さんが私たちを信じてくれるなら私たちも霊亜さんを心から信じてあげればいいだけの話ですよ」
「そっそれだけでいいの？」
「後はそうですね～…澪さまが霊亜さんになにかしてあげたいなら、それをしてあげればいいだけのことです」ニコ

◆◆◆

　会計を済まし、澪を追おうとする霊亜だったが
「霊亜まって！」
「…離してくれ柚稀、澪が」
「まだ話は終わってない」
　そんな彼を柚稀が止める
「なんど言っても無駄だ。俺の意思は変わらないぞ」
「やっぱり霊亜だけで成瀬澪を守りながら戦って勝てるとは思えない」
「言ってくれるねぇ」
「魔族だけじゃなく里まで相手にするなら尚更」
　互いに一歩もひけない二人は言い争いを続ける
「…なぁ柚稀」
「なに？」
「逆はできないのか？」
「逆？」
　霊亜の言っていることが理解できず柚稀は小首を傾げる
「お前がこのまま監視役として澪を見続けていれば里と対立、もといお前たちと戦う必要はなくなる。このままなにもなく平和に過ごせれば「それは無理」!?」
　柚稀はそう言い放つと周囲が異様な雰囲気となり柚稀は両腕を魔力で武装し、腰の刀で背後に迫るはぐれ悪魔を切り裂いた
　だが、それを合図にと言わんばかりあたりに無数のはぐれ悪魔たち

が現れた
「霊亜さがって、ここは私が「馬鹿言ってんじゃねぇよ」霊亜？」
「お前を一人で戦わせるなんざ俺がさせるかよ」
そう言うと霊亜はドライバーを出現させアイコンのスイッチを押す、そしてドライバーにアイコンをセットする
『バッチリミナー！　バッチリミナー！』
ドライバーからオレパーカーゴーストが現れた
「変身！」
『カイガン！　オレ！　レッツゴー・覚悟！　ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』
オレパーカーゴーストが霊亜に覆い被さると変身を完了する
「これは？」
柚稀は霊亜の変化に驚いた
「さぁ、魂、燃やすぜ！」
ガンガンセイバーを手に霊亜がはぐれ悪魔たちを切り刻んでいく、柚稀もそれに負けじとはぐれ悪魔たちを切っていく
ビリリリリリ!!
はぐれ悪魔が魔力の雷を放つ
「わっと、危ねぇな！だったらこれだ！」
怒った霊亜が０２と書かれた黄色のアイコンを取り出しスイッチを押すとそれをドライバーにセットする
するとドライバーから発明家エジソンの魂の化身『エジソンパーカーゴースト』が現れて霊亜の周りを飛び回る
霊亜はそのままドライバーのトリガーを引く
『カイガン！　エジソン！　エレキ！ひらめき！発明王！』
エジソンパーカーゴーストが覆い被さるとともに霊亜はエジソン魂へと変わる
はぐれ悪魔は理解が出来ないまま御構い無しに電撃を浴びせる
だが、電撃はダメージを与えるどころか逆に吸収されていく
ピンポン！
「よし！利用しようこれ」
霊亜はガンガンセイバーをガンモードに変形させる

そしてドライバーの目にガンガンセイバーをかざす
『ダイカイガーン！　ガンガンミナー！ガンガンミナー！』
効果音が流れ、霊亜がガンガンセイバーのトリガーを押す
銃口から先ほど吸収した電撃エネルギーをはぐれ悪魔に向ける
「柚稀！伏せろ!!」
「!?」スッ
『オメガ・シュート！』
柚稀が伏せたのを合図に霊亜が引き金を引くと電撃エネルギーが放たれ1匹のはぐれ悪魔に当たるとそこから電撃が他のはぐれ悪魔にも襲いかかり次の瞬間爆破し、はぐれ悪魔たちはあっという間に消え去った
「うっし！終わり～っと」
消滅を確認し終え、霊亜は変身を柚稀は武装を解いた
「いや～びっくりしたわ～」
おちゃらけたような態度でそうつぶやいていると
「霊亜」
「柚稀？」
霊亜の前にたち向かい合う柚稀
「助けてくれたことは嬉しかった。でも私とて里の人間。成瀬澪の魔王の力に引かれはぐれ悪魔の数も増えてきた…彼女の存在で周囲に危険が及ぶようなら里は成瀬澪を消滅対象へと切り替える。そうなれば私は容赦しない。例えそれで霊亜に恨まれたとしても」キリ
「…考え直す気はないと？」
「ええ。世界に害をなすものは斬る。それが私たち…そうでしょ？」
柚稀は霊亜に問う
霊亜とて元は里の人間、柚稀の言うことも理解はしている
しかし今回ばかりはそうだとわかっていても引くわけには行かなかった
「なら、俺の答えも、もうわかってんだろ？」
「…そうね」
二人は互いを見つめ合ったあと、柚稀は霊亜に背中を向け歩き出す

見せるわけにはいかなかったのだ。今の自分のこんなにも辛い顔を
霊亜がああ言った以上、もう止めることはできない、いずれ自分は霊亜と戦わなければならない
自分が愛している人に刃を向けねばならないからだ
「柚稀！」
「……なに？」
霊亜の呼ぶ声でなんとか平常心を保たせ霊亜に対峙する
「…悪かったな勝手にいなくなって。迷惑もかけて」
「えっ？」
「お前らを巻き込まないためとは言えお前の気持ちも考えずに５年もの間、心配をかけてすまなかった！」
「霊亜」
この時、霊亜は思っていた
この期を逃せば、戦うとなればこの言葉を述べるチャンスはない
だからこそ霊亜は柚稀に対する思いを余すことなく告げた
「…言いたいことは言った。じゃあ俺は行くぜ。またな柚稀」
「…霊亜」
柚稀にそう告げて霊亜は帰る場所へと戻っていくのだった

第８話　今まで食べたケーキの中で一番美味そう

はぐれ悪魔たちを撃退した霊亜は家に帰ると澪たちに出来事を一部始終話した
「ってなことがあって遅くなったんだ。ごめんな～心配かけて」
霊亜が申し訳なさそうに頭を下げた
「なるほど、お話はわかりました」
「そっかあ～よかった「とはいえ」…えっ？」
「私たちに不安な思いを味あわせておきながら自分は幼馴染さんといい感じになってるななんて本当にいいご身分ですね。ね～澪さま」
「そっ、そうね…」
ジド目で霊亜を見た万理亜が澪に同意の呼びかけをすると澪も同意する
「いやいや、俺はただはぐれ悪魔と戦ってただけで「いい訳は結構です」!?」
「私たちは霊亜さんを信じていますのに、そんなことされては不縁になりそうです」
「そっ、そんな～～～!?」
不縁になれば澪たちとも一緒にいられなくなる。それは今の霊亜にとっては死ぬ程、いや、死ぬよりも辛いことだった
「たっ、たのむ！嫌いにならないでくれ！いなくならないでくれ！俺ができることなら" なんでも" するから！」
「今、霊亜さん" なんでも" っておっしゃいましたね～」ニヤ
その言葉を聞いた瞬間、万理亜はそれを待っていたと言わんばかりに不適に笑う
「ではこれより霊亜さんには私たちとより深い信頼関係を深めてもらいましょう…そのためには！」

かぽ～ん♪

「で、万理亜ちゃん。これはいったい？」
「信頼を深めると言ったら裸のお付き合いが一番ですから」
「あ～なるほど。確かに」
「なんで霊亜はそこまで冷静なのかしら？」
　普通ならこの状況になれば少しは戸惑うだろうと思っていたのに霊亜は余裕そうだった
「何言ってんだ。可愛い妹たちとお風呂に入れるなんて嬉しいに決まってんじゃん」
「さっすが霊亜さん。話しのわかる人ですね～…ただぶっちゃけいえば少し恥ずかしそうにしてくれてもよかったですけど」
「ごめんな～」アハハ
　軽いノリで語り合う霊亜たち
「さて～それでは澪さま。手はず通りに～」
「うっうん……」テレ
　恥ずかしがりながらも霊亜の後ろに来た
　その時、澪は柚希のことを思い浮かべる
　霊亜と親しそうにしていた時のあのモヤモヤを思い返す
「（野中　柚希には…負けたくない！）」
　そう内心つぶやくとスポンジを泡だて霊亜の背中を流すため同じ位置にまでしゃがむ
「じゃ、じゃあ…はじめるわよ」
「おう、お願いしま～す」
　澪が霊亜の体をスポンジでゴシゴシする中
　万理亜がなにやら澪に合図を送ると澪は戸惑いつつも身に纏っていたバスタオルを外し、霊亜に抱きついた
「澪、どうした？なんかいつになく積極的だな」
「うっ、うるさいわね！て言うか動かないでよ。動いたら１００殺すわよ」
「じゃあ動こうかな「なんでよ!?」だって俺もう死んでるから殺される心配ないし～」

痛いところを突かれたと澪は一瞬固まったが直ぐに切り替える
「いいから動いちゃダメ…妹の頼みを聞いて」
「よし！好きにしてくれ！」
澪のいうことを聞き入れた霊亜はおとなしくじっとする
それにより澪も行動を開始する
自分の体をブラシのように上下させて霊亜を洗う
それを見ていた万理亜はよしよしとうなづく
「（恥ずかしい…恥ずかしいけど…でも）」
再び脳裏に浮かぶ霊亜が柚稀と仲良くする妄想
「（二人が仲良くしてると霊亜が離れていくような…いなくなっちゃうような感じがしてならない…ヤダ。そんなのヤダよ）」
焦る澪の気持ちが行動へと表されていく
「ふっふっふ～。いい感じになってきましたね。ではプランを2に移行しましょう」
そう言うと万理亜は先ほど霊亜が謝罪の意味も込めて買ってきたケーキを持ってきた
「さぁ霊亜さんケーキをお持ちしました～！」
「えっ？なぜに？」
「（いまです）うわぁ～滑って転んじゃいます～」棒読み
「万理亜ちゃん!?」
霊亜は急いで万理亜を抱き抱える
「ありがとうございます霊亜さん」
「いやいやなんのこれし（ヒュゥゥゥゥゥ）…ん？（ベチャ）…あっ…」
「ふっ…」
しかし滑った際に放り投げたケーキが霊亜の顔に落っこちてしまった
「ぶへっ!?ぶふぁ!?…うわ～べとべとだよ」
ケーキが顔や腕についてしまった
霊亜がシャワーで洗い流そうとすると
「いけません霊亜さん！せっかく霊亜さんが買ってきてくれたケーキなんですから…美味しく頂かないと」ペロリ

「ちょ万理亜ちゃん。くすぐったいよ」ソワソワ
「我慢してください。すぐ住みますから。ほら澪さまもいかがです？」
「…澪？」
澪の方に目を向けるとそこには呪いが発動してソワソワする澪が
「…おいで澪。舐めたいなら舐めていいんだぜ」
そう言うとクリームのついた左手を差し出す
「……あむっ！」
たまらず澪が指先についたクリームを甘噛みすると手首、腕と徐々に上がっていく
「ふぅ～…ご馳走様です」
「はぁ…はぁ…」ソワソワ
霊亜についたクリームを舐め尽くした二人。だが、まだ澪の呪いは溶けてはいなかった
「……」スッ
「うん？霊亜さん？」
突然立ち上がると霊亜は風呂場から出ていき、少しすると戻ってきた
そして霊亜の手には先ほどと同じ２つのケーキが
「えっと？霊亜さんこれはいったい？」
「わ～滑って転んじゃった～」棒読み
「「えっ？」」
先ほど万理亜がしたのと同じことをして滑って転び手にしていたケーキを放り投げた
そして放り投げたケーキが澪たちにかかる
「ちょっ？霊亜さん？」
「なっ、なにを…するの？」
「なにって…二人だけずるいからさ」黒笑み
そう言うとクリームまみれの２人を眺めてニヤニヤしていた
「まぁ、そんなわけでとりあえず２人とも、お互いに舐め合ってくれ」
「ちょ!?なっ、なに考えてんのよあんたは!?」

「いやー本当なら俺がやってやりたいんだけど、俺飯食えないからは、今までのケーキの中で一番美味そうだけどな…だから頼む。俺の代わりに味わってくれ」

霊亞が2人にそう願い出る

「で、でも…」

「澪さま。ここは霊亞さんの思いに応えてあげましょう」

確かに霊亜は死んでいるがために自分たちのように物を食べる喜びを感じられない

何より、霊亜にはいつも助けられてばかりで自分はなに1つしてあげられない

こんなことでも霊亞の役にたてるならと戸惑いながらも澪は承諾し、万理亜とお互いの体についたケーキを舐め合う

「みっ澪さま～」

「……あうん！」

澪が舐められる度に喘ぎ声をだす

「あん！…まっ、万理亜くすぐったい／／／」

「澪さま、最後のケーキまで舐め終えるまでの辛抱です」

万理亜が説得し、恥ずかしながらも続けた

「2人とも可愛いすぎ」ジュルリ

そんな2人を霊亜がいやらしい目で見つめていた

「はうん！」
　その後も二人は体についたケーキを舐め尽くし、力尽きてその場に倒れたのだった
「はぁ…はぁ…おっ…お兄ちゃん」
「れっ…れいあさん」
「ご馳走様でした！」
　こうして信頼関係を深める作戦は予想以上の結果に終わったのだった

　その後、いつもの就寝時間となり皆それぞれ寝静まる中、霊亜だけは寝付けずにいた
　霊亜は自分の体のことを考えていた
　早く生き返るためにはあと11個のアイコンを手に入れなければならない
　生き返れたならば本当の意味で澪たちと家族として幸せな日々をおくれのだから
「はぁ…はやくアイコンを手に入れないと…」
『そんな簡単に行くか馬鹿者が』
「!?」
　部屋に響く年老いた男の声が
「その声っておっちゃん!?どこだおっちゃん！」
「ここだよ～ん」
「うわっ!?」
　いつの間にか勉強机の椅子に座っている老人が
「で、おっちゃんが俺の前に来ってことはアイコンの情報か！」
「まぁ、そんなところだ。心してきけ。鳴かぬなら、殺してしまえホトトギス」
「それってことは…次は織田信長か!!」
「そういうことだ。しかし気を抜くなよ。いつもいつもうまくいくとは限らんからな」

仙人が霊亜に注意を促す
「たとえ何があろうと俺は絶対生き返る。そうすれば澪たちと真の意味で家族として暮らせる。幽霊としてでなく、生身の肉体で、この手であいつを抱きしめてやりたいんだ」
「そうか…ならば頑張ることだな」
そう言うと仙人はすぅっと消えていった
「絶対に15個のアイコンを手に入れてみせるぜ！」
そう霊亜は決意を込めるのだった

第9話　わかった。協力してやるよ

とある日の朝、霊亜たちはいつものように学校に登校中だった
「ふぁ～」
「澪眠いのか？大丈夫か？」
「昨日徹夜で宿題をやっててたからね」
眼をこすりながら澪はそう言った
「澪は熱心だな。感心するよ」
「だったら少しは勉強したら？」
「いいよ別に、勉強なんかしてたら澪との時間が削られちまうじゃん。俺は澪と楽しい日々が過ごせりゃそれで満足なんだ」
「…馬鹿」ボソッ
霊亜の言葉に照れくささを感じ、ボソリとつぶやく澪だった
そんな時だった
「霊亜の兄貴ぃぃぃぃ!!!」
「うん？」
「あっ、あいつらは!?」
背後から自分の名を呼ばれて霊亜が振り向くと以前、澪をナンパした不良たちのうちの1人だった
それを見た澪が霊亜の後ろに隠れる
「兄貴、探しやしたぜ」ハァハァ
「お前、駒村組の？…どうしたんだそんなに慌てて？」
「…うあぁぁ～ん！お願いします助けてください!!」
「なっなんだってんだ!?」
いきなり泣きつかれて困惑する霊亜と澪だった

「なんだって？駒村が？」
「駒村って人っててたしか霊亜の知り合いだったわね」
「はい、駒村さんは俺らの憧れの存在で、俺たちみたいなやつらに分け隔てなく接してくれて人望も厚い人なんすけど…数日前からまるで

人が変わったかのように横暴で冷たい人になってしまって」
彼の話によると最近。他校に赴き、そこの不良たちに自分の配下になるように言ってきては拒否したグループを自分たちを引き連れて襲撃して完膚なきまでに痛めつけるのである
そうしてどんどんとその強引なやり方で他のグループを配下に収めて言ってるのである
もちろんそのやり方よしと言えるはずもなく何人かの仲間が駒村にやめるように説得したが
それにより怒りをかったものは数日感の間にまわりで不思議な現象がおきて
事故に巻き込まれたりなどして入院するほどの怪我を負ったとのこと
「あの駒村がそんなことを…」
少なくとも霊亜が知ってる駒村はそんなやつではなかった
不良ではあるものの他の不良たちにいちゃもんをつけられた小さい子を助けてあげたり、部下を傷つけた奴は許さないというほど仲間思いのやつだった
「きっとあの男のせいだ。あの男が駒村さんを変えちまったんだ!!」
「あの男?」
「最近じまたで噂になってるんすが、願いを叶える方法を教えてくれる男ってのがいて。偶然にも駒村さんが会ったらしいんす。それからなんですよこの騒動が始まったのは…だからきっとあいつの仕業に違いないいっす!」
「まぁまぁ落ちつきなさいよ」
興奮した不良を澪がなだめる
「お願いします!どうか兄貴の力で駒村さんをもとに戻してください!!」
土下座してお願いをする不良を見た霊亜が頬をポリポリかく
「どうするの霊亜?」
「……わかった。協力してやるよ」
「まじっすか!?ありがとうございます!!」

万理亜とも合流し、不良に連れられて駒村組のアジトにやってきた
霊亜たち
すると
「話になんねぇよ!!」
いきなり怒鳴り声をあげて他校の不良グループのリーダーが不機嫌そうな態度で出ていった
「もしかしてさっきのが話しにあった？」
「へい、おそらくはまた傘下に入るようういったんでしょうね…」
そう言うと不良が駒村のとこに霊亜たちを案内する
「失礼しやす駒村さん」
「あぁ？…何だテメェか。なんのようだ？」
「あっいえ、今日は駒村さんにお客様です」
不良はそう言うと駒村に霊亜たちを会わせる
「おぉ！霊亜じゃねぇか元気そうだな」
「お前もな。…ところでさ、さっきのなんなの？」
「あぁ、俺の部下になれって言ったらキレやがってな「お前の傘下に加わるなんざごめんだ」だとさ」
若干イライラしながら駒村はそういった
「だがいいさ、俺はいずれ天下をとるんだ。織田信長のようにな」
「信長？」
「おうよ。信長は俺の憧れなんだ…」
憧れてるという駒村の表情を見ているだけならとても強引なやり方で不良たちを傘下に入れようとしてるとは思えなかった
「そんな時。ある男からこいつをもらってな」
そう言うと駒村はあるものを取り出す
それはかなり年代が立っており、男曰く信長が羽織っていたとされるマントだそうだ
「こいつを持ってると信長になった気になれるんだ…俺は信長のよう

になる！野望を邪魔する奴は誰だろうと容赦はしない…" さっきのやつ" も含めてな」
駒村がそう言った時だった

ドンガラガッシャーーン!!

「「「!?」」」
向こうの方からものすごい音が聞こえた
「ほ～ら、きっと俺に逆らったから天罰がくだったんだ。あは、あはははは！」
「俺見てくる!!」
「霊亜!?」
「待ってください！」

「ここらへんのはず…あっ!?」
霊亜が行ってみるとそこには先ほど駒村の申し出を断った他校の不良グループのリーダーが倒れてきた鉄骨などにより怪我をしている光景だった
「いっ、いてぇよ～」
「おい、大丈夫か？しっかりしろ」
「あはは～。イエ～イ。大成功～♪」
「やっぱり眼魔の仕業か」
駆け寄ると男のとなりから道化師のような格好をした眼魔が現れた
霊亜はドライバーを出現させるとアイコンのスイッチを押す
『アーイ　バッチリミナー！バッチリミナー！』
トリガーを引きベルトが瞬く
『カイガン！　オレ！　レッツゴー・覚悟！　ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』
トランジェント姿に変わりオレパーカーゴーストを羽織りゴーストへと変身する

そしてガンガンセイバーを構えて眼魔に向かっていく
「はぁぁぁぁ!!」
「うん？おわっと～!?危ないじゃないか!!」
霊亜と眼魔が激しい攻防を繰り広げる
「ほらこっちこっち～」
「くそっ！」
だが、さすが道化師と言わんばかりにトリッキーな動きで攻撃をかわしてくため戦闘のペースを崩されていく
「今度はこっちだくらえ、ぼぉぉぉん」
「うわっ!?」
両手から光弾のようなものを撃ってきたのでそれをかわす
「やってくれたなこんにゃろめ!!」
おかえしと言わんばかりに霊亜が剣を振るう
「ぐへぇ!!」
剣先にあたって倒れ込む眼魔に剣を振り落とすも
「死ぬぅ～！」
とかいいつつ二人に分裂してそれをかわした
「えっ？増えた!?」
「はっは～二倍～にば～い♪」
そう言うと今度は二人がかりで襲いかかってきた
一体でも厄介なのに増えたことで更にやりづらくなった
「ファイト～」
「一発!!」
「ぐぁぁぁぁぁ!!」
連続でパンチを喰らい霊亜が転がるように倒れる
その間に眼魔がコントしていた
「あ～もう、腹立つぜ」
「な～にやってんだよ」
そこにユルセンが現れた
「ガンガンセイバーを2つに割ってくっつけて薙刀モードだ！」
「…わかったよ」

ユルセンの指示のもとガンガンセイバーを割ってくっつけ薙刀モードに変形させた7
「やっちゃるぜぇぇ!!」
「あん。兄さん危ない！」
「コント中に攻撃とか反則よ～！」
「やかましい!!」
薙刀のリーチの長さを活かして敵をよそ付けず、次々と攻撃を喰らわす
そして怯んだ隙にベルトにガンガンセイバーをかざす
『ガンガンミナー！ガンガンミナー！』
そして霊亜は構える
「今のうちに」ボソッ
そんな中、内一体がそおっと逃げ出す
それに気づかず目の前の眼魔にむかってガンガンセイバーのトリガーをひく
『オメガストリーム！』
「おらっおらっ、おらぁぁぁ!!!」
「もう終わりかい、さっき出てきた場合やのに～!!」
そう言うと眼魔が大爆発した
「よし！…ってあれ？アイコンがない？」
あたりを探してもアイコンが見当たらない
「…まさか俺が倒したのって…」
十中八九ニセ物だった
「チクショーーー!!!魔力が無駄になったぁぁぁぁぁぁ!!!!」
悔しさで叫びだす霊亜だった

そしてそんな霊亜を遠くからみるゴーストのような姿で青い姿をした存在がいることに霊亜は気づいていないのであった

第１０話　お前にはお前を慕う仲間がたくさんいる

澪たちと合流し戻ってきた霊亜たち
「わっわかった！お前の配下に加わるから勘弁してくれぇぇ!!
突然自分たちの横を逃げるように走り去ったのは先程、眼魔に襲われた他の不良グループのリーダーだった
「はぁ…これで何件目になるのやら…」カキカキ
不良がメモ帳を書いていると万理亜がふと何かに気づいた
「ちょっといいですかそのメモ帳」
「えっ？あっはい。どうぞ」
メモ帳を取り出して今までに書いてある点をペンでなぞってみるとそれは目玉の形をしていた
「霊亜さん、これって？」
「間違いない。眼魔は何かを企んでるな」
そんな時だった

数百キロメートルの範囲が謎の光に包まれた

グラグラグラグラグラグラ!!!

「なっ、なんだ!?」
「これはいったい？」
「もう始めやがったのか!?」
そして突然大きな揺れが起こり始めたと思ったら包まれたかしょが徐々に空へと浮き始める
「ははははは！」
「駒村？」
「ボス!?」
そこに現れたのは信長のマントを手にした駒村だった
「ついに、俺が天下を取る時が来たんだ！あはははは!!」
「駒村、これはいったい？」

「見ろぉ！ここが俺の城となる。俺の天下統一のための拠点となるのさ!!」
　両手を広げながら浮き上がるこの場合から駒村が下を見下ろす
「ボス！やめてください。こんなのボスらしくないっすよ!?」
「これが本当の俺さ。俺は信長になるんだぁぁ!!!」オーラ
『いいぞ～。もう少し、もう少しだぁ～』
　その様子を見ていた眼魔が現れた
「眼魔！」
「そこにいるんですね！てりゃぁぁ！」
　以前開発した新兵器から特殊な液体を散布する
　すると透明だった眼魔の姿が霊亜達以外の視界にも映った
「あれっ？バレテーラ」
「なっ、ばっ化物!?」
「眼魔、あんたたちの好きにはさせないわよ！」
「へへ～ん、今更なにをしてもむっだだよ～ん」
　そう言うと眼魔は駒村に近づく
「さぁ。いよいよだよ～。これよりお前は信長として世界に君臨するのさ～」
「俺が…」
「そうだ。お前こそこの世界を支配するにふさわしい」
「そうだ。俺は選ばれし人間なんだ。俺は織田信長になるぅぅ!!」オーラ
　眼魔の言葉に耳を傾け、自身が信長になると言った瞬間全身から怪しい光を放つ
「いかん！」
「どうしたの霊亜？」
「このままじゃ、駒村がゴーストを生み出す。そうなったら駒村が死んじまう！」
「なんですって!?」
　霊亜の口から聞かされたその内容に全員が驚く
「やめろ駒村！このままじゃお前死んじまうぞ!!」

「信長になれるなら命なんて惜しくねぇよ！」
　自らの命さえも投げ出すと駒村は言い出す
「ボス！やめてください!!ボスに死なれたら俺たちどうしたらいいかわかんないっす!!」
「っ？」
「耳を貸すな。お前は信長になるんだ～」
　自分のために心から泣いてくれる部下の顔を見た駒村の心が揺れ動くも
　それをさせじと眼魔が誘惑を続ける
　その間にも徐々に駒村の体とマントから放たれる光が強くなっていく
「あはははは～もう何をしても終わりさ～」
「そうはさせるか！」
　霊亜は駒村を抱きしめる
「れっ、霊亜…？」
「駒村、お前にはお前を慕う仲間がたくさんいる。それなのにお前はそいつらをおいて行っちまうのか？」
「俺は…俺は…」
「あっ、貴様!!「霊亜の邪魔はさせないわ！」なにぃ!?」
　駒村を救わせるため、霊亜を邪魔しようとする眼魔の前に澪と万理亜が立ちはだかる
　そしてついに駒村から光が消えた
　同時にマントからも光が消えた
「しまった!?」
「…俺は？」
「ボスゥゥゥ～」ナキ
　霊亜のおかげでもとに戻った駒村のもとに部下が駆け寄る
「駒村、信長は怖い武将だと思われてるが、本当は身分の上下に関係なく仲間を大切にしていたんだ。仲間を大切にしていたお前のやり方こそ、まさに信長そのものさ！」
「俺が…」

「そうっすよ。だからこそ俺たちはボスについていくんすよ!!」
「みんな…すまねぇ!!」
自分の今までのことを悔やみ頭を下げた
その際に今度は綺麗な光が駒村の体を包む
「あれは!」
「よくも邪魔してくれたな〜。遊びの時間は終わりだ!!」
「…まずはこっちだな!」
ドライバーを展開し、今回はオレゴーストアイコンではなく緑色のアイコンを手にする
『アーイ! バッチリミナー!バッチリミナー!』
セットした瞬間現れたのは弓の名手にして誇り高き義賊「ロビン・フッド」の魂を宿したロビンフッドパーカーゴーストだった
「変身!!」
『カイガン! ロビンフッド! ハロー!アロー!森で会おう!』
ロビンフッドパーカーゴーストが覆いかぶさり霊亜はロビンフッド魂に変身した
ガンガンセイバーを手にすると

ピィィィィィ〜!

そこにゴーストガジェットであり、電話機にもなるコンドルデンワーがかけつけガンガンセイバーと合体しアローモードへ変形させた
「おら!」
「そんなもんあったりませ〜ん!」
「なっ、この!!」
狙いを定めようにもちょこまか動く眼魔になかなか狙いが定まらない
「このこの〜!」
「うっさい!」ベシッ
「ありゃ〜!?」

眼魔を蹴り飛ばした霊亜はすかさず矢を放つも
それを分身を生み出し盾にして攻撃を防ぐ
「またこれか!?うらぁ!!」
霊亜は襲いかかってくる分身体を蹴散らしていく
さらに連続で矢を放ち分身を消滅させていく
「もう怒ったぞ～!!」
眼魔がまた分裂し、霊亜の周りをぐるりと囲む
その際、霊亜はドライバーにガンガンセイバーをかざす
『ダイカイガーン！　ガンガンミナー！ガンガンミナー！』
ゆっくりと弓を構えると今度はドライバーのトリガーもひく
『ダイカイガーン！　ロビンフッド！オメガドライブ！』
すると霊亜もまた分身し、そのままガンガンセイバーのトリガーをひく
『オメガストライク!!』
エネルギーを纏い、放たれた矢は眼魔を突き刺す
「これまたナイスショートでぇぇぇ!!!!」
断末魔とともに眼魔が爆発した
そして足元にアイコンが転がってきた
「よし！」
「やった～！」
「やりましたね霊亜さん！」
霊亜のもとに澪たちが駆け寄ってきた
だが、喜ぶのも束の間

グララララララララ!!!!

「なっなに!?」
「大変ですこれ落ちてます!!」
「浮かせてる眼魔を倒したから!?」
「俺に任せろ!!」
霊亜は島から飛び降りた

「ユルセン!!」
「なんか用か～？」
　呼ばれてユルセンが現れた
「ニュートンアイコン貸せ！お前もってたろ!?」
「え～？どうしよっかな～」
「んなこと言ってねえで貸せ!!」
「おいちょ、やめろって…あひゃひゃひゃひゃひゃひゃｗｗｗくすぐてえってｗｗｗ！」
　霊亜はお構いなしにユルセンからニュートンアイコンを借りるとそれをセットする
『アーイ！　バッチリミナー！バッチリミナー！』
　ベルトからニュートンパーカーゴーストが現れた
　霊亜はそのままトリガーをひく
『カイガン！　ニュートン！リンゴが落下！引き寄せまっか！』
　地面に着地すると斥力の能力をもつ右手を浮かぶ島に向ける
『ダイカイガーン！　ニュートン！オメガドライブ！』
　斥力のちからで落下の威力を抑えていく
　そして島はもとの場所へと戻った
「やりましたよ澪さま～」
「あれっ？でも霊亜はどうなっちゃったの？」
「……はっ、まさか島の下敷きに!?」
「そっそんな…れっ霊亜ぁぁぁ!!!??!!」
　あわてふためく澪たちだが
「どうした？そんなに慌てて？」
「「きゃあぁぁぁぁぁ!!!??!!」」
　地面から生え出てきたみたいな感じで霊亜がでてきた
「びっくりさせないでよバカァァ!!」
「ごめんごめん」
「おい、なんか忘れてないか～？」
「忘れてる…あっ、そうだった！」
　ユルセンのといで思い出した霊亜は駒村たちの方に向かった

「駒村、これ借りるぞ」
ゴーストが生まれかけているマントに霊亜が目を描く
すると煙の中からノブナガパーカーゴーストが現れた
「よし、こいノブナガ!」
霊亜がノブナガパーカーゴーストのアイコンを手にしようとした
その時
「はっ!!」
「なっ!?」
突然何者かが襲いかかってきた
「お前は!?」
自分の姿と告知し、尚且つ色は青く角が二本のライダーが
「スペクター!?」
「…俺とともに戦え!!」
ノブナガパーカーゴーストはスペクターを選んだのかスペクター
のドライバーに吸収されそこからアイコンがでてきた
「ふん」
鼻で霊亜をわらうとスペクターはそこから消えてしまった
「マジかよ…」
「なんなの?」
「なにものなんですかあの青いのは?」
アイコンを取られてしまいただ呆然と立ち尽くす霊亜たちだった

「スペクター……」
「……」
そしてその様子を遠くから見る若者と少し老けた男性がそこにはいた

第11話　上目だけの関係、結局は赤の他人でしかない

狂気と化した狛村を救い、ノブナガゴーストを生み出し、力を貸してほしいと頼もうとした時

謎の青いライダーことスペクターがそこに割り込んできた

そしてスペクターは霊亜が怯んでいる隙にノブナガゴーストのアイコンを手に入れ、その場から立ち去っていったのだった

【東城家】

「ちょっと染みますよ～」ピタッ

「ぐぅぅ～くぅぅ～。染みる～」

万理亜が霊亜の顔の傷口に消毒液をつけた綿をつけると涙目で痛そうな表情をしていた

「本当に大丈夫なの霊亜？」

「あぁ、なんとかな。ありがとな澪」

心配そうな顔を浮かべる澪に優しく語りかける霊亜だった

「にしてもなんなんですかねあの青いライダーさん」プンスカ

「そうよそうよ。それにいきなり攻撃を仕掛けてきたし」プンスカ

「あぁ…」

澪や万理亜たちが怒った顔で話しているのは先日のとある日に事件のことだった

ことのきっかけは夜に遡る

「よし、ベートーベンのアイコンをゲットしたぜ」

「やったわね霊亜」

「これで後残り１０個で霊亜さんは生き返れるんですね！」

「あぁ、残りのアイコンも必ず手に入れてみせるぜ」

ベートーベンのアイコンを手に入れ、上機嫌なまま家に帰ろうとする霊亜たち

「……」

しかし、その様子を高い場所から見下ろす影があった

そして影はしばらく霊亜たちを眺めていたが

少しして手を空へとかざす

「っ？」

「どうしたんですか澪さ……!?」

ズゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーン！

「おいおい、これって？」

「人よけの結界みたいね」

「まさか、現魔王派の刺客？それとも眼魔？」

あたりを警戒する霊亜たち

「…！ねぇあれ！」

「どうしました澪さま!?」

澪が何かに気づいてその方を指さす

「…あっ、あいつは！」

指さす場所には高い場所から自分たちを見下ろす一つの人影が

バッ！

ドスゥゥゥン！

「「っ!?」」

影はそこから飛び降りて地面に着地し、ゆっくりと立ち上がる

「えっ？ちょっと、あの姿、それにあのベルト…あれって…？」

「れ、霊亜さんの変身した時の姿とそっくりです!?」

そう、霊亜立ちの前に現れたのは

以前、駒村との一件の時、ノブナガから力を借りようとした時、

突如として現れ、横取りというような形でノブナガパーカーゴーストから力を受け取り、アイコンを持ち去っていったスペクターだった

「なぜここにいるんだスペクター!」

「霊亜さんあの人のこと知ってるんですか?」

「あぁ、理由は知らないが、俺と同じでアイコンを集めてる奴さ」

「えっ!?」

「アイコンを集めてる!?」

霊亜からスペクターもまたアイコンを集めてると聞いて澪たちは驚きの表情を浮かべる

「まさかこんなところで再会するとはな」

「それはこっちの台詞だっての。てめぇあの時はよくもノブナガのアイコン持って行きやがったな!」プンスカ

「貴様の都合なんか知るか……俺は、俺の願いを叶えるために全てのアイコンを集める!」ゴゴゴゴゴゴゴ

「「っ!?」」

スペクターから放たれる威圧に澪たちはおろか、霊亜までも震えを感じるほどだった

「ここでお前と会えたのならちょうどいい、その手に持っているベートーベンのアイコンと貴様の持っている残りのアイコンも俺が頂く！」

「なに!?」

「行くぞ！」

そう言うとスペクターは戦闘態勢に入るとともに霊亜に向かってきた

「霊亜!?」

「下がってろ二人とも！」カチャ

ベルトを出現させ、オレゴーストアイコンのスイッチを押し

さらにそのオレゴーストアイコンをドライバーに挿入する

『アーイ！　バッチリミナー！　バッチリミナー！　バッチリミナー！』

ドライバーからオレパーカーゴーストが現れ、霊亜の周りをぐるぐる跳回る

そして霊亜がドライバーのレバーを動かし、ゴーストドライバーが

まばたきする

『カイガン！　オレ！　レッツゴー・覚悟！　ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

トランジェント姿となった霊亜にオレパーカーゴーストが覆いかぶさり

ゴースト・オレ魂へと変身を完了させ、攻めかかるスペクターを迎え撃つ

「はぁぁ！」

「ぐっ!?」

「ていぁぁ!!」

「うわあぁぁっ!?」

スペクターは怒濤の攻撃を仕掛け、霊亜に連続攻撃をお見舞いし

霊亜は防戦一方のまま吹き飛ばされた

「霊亜！」

「霊亜さん！」

「ぐっ…っ！　澪、万理亜ちゃん！来ちゃダメだ。危ないから離れてろ！」

危機を感じた澪たちが駆けつけようとするも

２人を危険にさらすまいと霊亜がそれを拒む

「よそ見をしてる暇があるのか！」

「ぐっ!?」

しかし、２人の身を守ろうとする霊亜にスペクターは容赦のない攻撃を仕掛ける

「せぇぇぃ!!」

「ぐあぁぁぁぁ!!!」

ストレートパンチがヒットし、霊亜は地面を転がるように倒れた

「っち、この野郎。もう頭きた!!」

霊亜はやられっぱなしじゃないと言わんばかりに別のアイコンを取り出し、スイッチを押す

そしてドライバーに装填する

『バッチリミナー！　バッチリミナー！』

するとドライバーからムサシパーカーゴーストが現れ

霊亜の周りをくるくると回る

そして霊亜はトリガーを引き、ドライバーが瞬く

『カイガン！　ムサシ！　決闘！ズバッと！超剣豪！』

ムサシパーカーゴーストが覆いかぶさり霊亜はムサシ魂へとチェンジするとともにガンガンセイバーを二刀流モードに切り替え、これを構える

「いっけー霊亜ー!・そのままやっつけちゃえ!」

「頑張ってください霊亜さーん!」

澪と万理亜が霊亜を応援する

「…以前は1人じゃなかったか?・あいつらはなんだ?」

以前会った時にはいなかった澪達の存在に気づいたスペクターが霊亜に尋ねる

「へっ、俺の可愛い妹たちさ」キリッ

「妹だと?・お前、妹がいたのか?」

「あぁ、血は繋ってないがな」

「……なんだと?」ピキ

話しを聞いた瞬間、何やらスペクターは不機嫌な顔になった

「くだらん」

「っ!?…あぁ~ん?・今なんつった?」カチン

「くだらんと言ったんだ。なにが血の繋がりのない妹だ。そんなのは

上目だけの関係、結局は赤の他人でしかない」

「っ!?」ピキキ

スペクターの放ったその言葉は澪と万理亜の心に大きな亀裂が出来そうなほどの衝撃を与えた

「……ざけんな」ボソッ

「うん？」

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

突如として霊亜が怒りとともに大声で叫んだ

「俺たちの関係が上目だけの関係だと？結局は赤の他人だと？……ふざけんのも大概にしやがれ!!」

「れい…あ？」

「お前は澪や万理亜ちゃんがどんな思いで生きてきたか知らないからそんなことがいえんだ！お前に何がわかるってんだよ！二人の気持ちも知らずに勝手なこと抜かすんじゃねぇよ!!」

霊亜はとてつもない怒りの表情を見せスペクターの言葉を論破する

「あぁもう頭きた！俺の大事なもんを侮辱したテメェにはその償いをしてもらうぜ！」

そう言いながらスペクターにむけて剣を構えるのだった

第12話　ぐつ…クソオ～！

ベートーベンのアイコンを手に入れ、家路を急ごうとする霊亜たち

しかしそこに霊亜と同様にアイコンに自分の願いを叶えさせるためそれらを集める男

仮面ライダースペクターが立ちはだかる

そしてスペクターは出会って早々、霊亜の持つベートーベンゴーストアイコン並びに今まで霊亜の手にしたアイコンを奪うべく襲いかかってきた

スペクターの猛攻に苦戦する霊亜だが、やられてばかりにさせじとムサシゴーストアイコンを使い、ムサシ魂へ変化しスペクターに挑む

その戦いの最中、澪たちの存在に気づいたスペクターが彼女たちの関係を尋ね

霊亜はそれに答え、自分たちが兄妹であることを告げる

しかしその後に霊亜が義兄妹であることを説明した時

スペクターはつまらなそうな顔を浮かべながら霊亜たちの関係を侮辱する

それに怒り狂った霊亜はその勢いのままスペクターへと向かっていった

「おら!うりゃ!」カキン!

「ふっ!」キン!

「おりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃ!!!!!」キンキンキンキンキン!

「ふうううううん!」キンキンキンキンキン!

ガンガンセイバーを二刀流モードに変形させスペクターを攻撃する霊亜に対してスペクターは自身の専用武器であり

右手の形を模した武器『ガンガンハンド』を巧みに駆使しその攻撃を防いでいく

「ふっ、ぬん!」

「なっ!?」

「はぁぁぁ!!」

「うわぁぁ!!」

スペクターは戦いの中で霊亜の行動を読みきり、隙をついて重い一撃を与えた上に

さらにそこから瞬時にガンガンハンドをポンプアップさせ

そこから露わになった銃口から弾丸が放たれ、霊亜は大きく吹き飛ばされた

「霊亜!?」

「まさかあの霊亜さんが手も足も出ないなんて」
２人の戦いを離れた場所から見ていた澪と万理亜は霊亜を最も簡単に薙ぎ払うスペクターの強さに恐怖していた
「ぐっ…クソォ～！」
「しぶといな。……ならば」
そう言うとスペクターは懐からアイコンを取り出す
スイッチを押すとともにドライバーにアイコンをセットする
『アーイ！　バッチリミロー！バッチリミロー！』
アイコンをセットすると、ドライバーからパーカーゴーストが現れる
「あっ！あれって!?」
何かに気づいた澪がパーカーゴーストを指差す
それもそのはず、ドライバーから出てきたパーカーゴーストは力を借りようとした時にスペクターに横取りされ、
奪われてしまったノブナガゴーストだったのだから
そしてノブナガパーカーゴーストがスペクターの周りをくるくる周る中

スペクターがドライバーのトリガーを引く

『カイガン！　我の生き様！桶狭間！』

効果音か鳴り響くとともにノブナガパーカーゴーストがスペクターに覆いかぶさり、スペクターはノブナガ魂へと変化する

そしてガンガンハンドを構え、射撃体勢をとる

「っ!?」

「喰らえ！」

バキュン！

「うわわわ!?」

弾丸を避け、駈け出す霊亜だったが

「逃がすものか！」

スペクターは追撃の弾丸を放ち、霊亜を攻撃する

「くそっ、そっちが銃撃戦をしたいってんなら俺もこいつで勝負してやるぜ！」

霊亜は攻撃を回避するとともに手にしたアイコンのスイッチを押すとともにドライバーにセットする

『アーイ！　バッチリミナー！バッチリミナー！』

効果音が鳴り響く中、ドライバーからエジソンパーカーゴーストが現れ、霊亜はそのままトリガーを引く

『カイガン！　エジソン！　エレキ！閃き！発明王！』

エジソンパーカーゴーストが覆いかぶさるとともに霊亜はエジソン魂へと変身し、ガンガンセイバーを銃モードに変形させる

「はぁぁぁ!!」

銃口を向け、雷を帯びた弾丸をスペクターに向けて放つ

「ふん。たあぁぁ！」

スペクターもまたそれをかわし、霊亜に向けて弾丸を放つ

２人は一歩も譲らぬ銃撃戦を続ける

「このままじゃ埒があかない、こうなったら！」

霊亜は勝負を決めるべくガンガンセイバーをドライバーにかざす

『ダイカイガーン！　ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

ガンガンセイバーの銃口にエネルギーが集まっていく

「」スッ

『ダイカイガーン！　ガンガンミロー！ガンガンミロー！』

しかしそれを見ていたスペクターもまた手にしているガンガンハ

ンドをドライバーにかざす

それとともにガンガンハンドの銃口にもエネルギーが充填されていく

「いっけぇぇぇ!!!」

『オメガ・シュート!』

「ふっ!」

『オメガ・スパーク!』

霊亜とスペクターは違いに相手に向かって銃を構え、ほぼ同時にトリガーを引いた

放たれたエネルギー弾はまっすぐに向かっていく

ビリリリリリ!

弾丸同士がわずかに擦れながら通り過ぎ、霊亜とスペクターに向かっていく

「なっ!?うわぁぁ!!?」

霊亜はスペクターの放ったエネルギー弾をまともに受けて吹き飛ばされた

「っ!ぐうぅぅ!?」

しかし、スペクターは霊亜よりも俊敏な動きでガンガンハンドを盾

にして防御体勢をとり

霊亜の放ったエネルギー弾を防御した

「ぐっ…くぅぅ…」

ボロボロになりながらも諦めないと言わんばかりに立ち上がろうとする霊亜だったが

「…いい加減、沈め!!」

スペクターはそう言うとドライバーのトリガーに手をかけ、それを引く

『ダイカイガーン！　ノブナガ！　オメガ・ドライブ！』

「はぁぁ！」

「なっ!?」

全身から溢れ出るエネルギーを右足に集約させ、スペクターは天に向かって飛び上がる

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!?」

そして右足を突き出し、必殺のオメガ・ドライブを放ち霊亜を遠くまで吹き飛ばした

必殺技の衝撃は凄まじく、吹き飛ばされたと共に霊亜は変身が強制

解除されると共に

反動でエジソンアイコンを地面に落としてしまった

「霊亜!!」

「澪さま!……っ!」

澪は吹き飛ばされた霊亜の元に駆け寄り

万理亜は地面に落ちたエジソンアイコンを回収しようと急ぐ

「あとちょっとです!」

エジソンアイコンを回収すべく万理亜が手を伸ばす

「」ヒョイ

「あっ!?」

しかし一歩及ばず、エジソンアイコンはスペクターの手に渡ってしまった

「返してください!それは霊亜さんにとってとっても大切なものなんです!」

「うるさい」ドン

「きゃっ!?」ドサッ

万理亜がエジソンアイコンを取り返そうとするも

鬱陶しがったスペクターが万理亜を突き飛ばした

そしてそのままスペクターは残りのアイコンを奪うべく霊亜の方に近づく

「ダメ！」

「っ？」

しかし、そんなスペクターの前に澪が立ちはだかる

澪は両手を目一杯広げて通せんぼする

「退け」

「退かない！」

スペクターは澪を威圧しながら退くよう呼びかけるも

それに怯まず澪は一向に退こうとしない

「……退けと言っている」カチャ

ガンガンハンドの銃口を向けて再度、澪を威圧する

「…嫌だ。絶対に退かないんだから！」

しかし、全身が震えながらも澪はそれでも退こうとはしなかった

「……ふん。興が削がれた」

「っ？」

「今日はお前のその勇姿に免じて引いてやる。……だが、次はない」

そう言うとスペクターは何処へともなく去っていくのだった

「……あっ!?霊亜！万理亜!?」

突然の事態で固まっていた澪だったが、ふと我に返って倒れる霊亜達に呼びかけるのだった